俳人遺墨

911.3
Ka53
ウ

911.3-Ka53ウ
1200500755890

始

514

911.3
KA53

金子健二著

俳人遺墨

湯川弘文社刊

968
70

緒言

本書は私の先代に如蘭（平六郎、大行）と拳石（平六郎、宗證）といふ父子打揃うて俳諧を好む人があつて、特に如蘭は寛政五年に芭蕉百回忌を營み、遠近の俳友を招請して蕉翁の爲に盛大な追善會を催し、又それを機會に蕉翁紫陽花の句碑を庭園に立て、爾來父子相續いてこの道に精進し、亦北國行脚の俳人が此の句碑をたづねて來る毎にこれを宿して俳諧の友を集めて樂しみを共にすることを忘れなかつたが、それと同時に、是等の雅客に必ず揮毫して貰ふことを怠らなかつたので、それが積りに積つて可成り多くの紙數になつて、この書物とすらなつた譯である。勿論この中にはわざわざ自分から出かけて行つて書いてもらつたものもある。揮毫者の數は約三百名、年代は寶曆、明和、安永、天明、寛政、享和、文

化、文政、天保（初葉）にわたつてゐる。揮毫した俳人は概ね北國行脚の人々であつて、第二流どころの者が多い。隨つて是等の俳諧者の作品とその筆蹟を通して、今日學ぶところが相當に多いのである。それは俳諧の道が最も民衆化し、又それが爲に最も通俗化した、其の言はば、生きたままの生活諸相の研究資料を、こゝから學び得るからである。芭蕉や、蕉門直系の所謂大宗匠達の、その餘りにもとびはなれた秀句だけを研究してゐては、その當時の民衆に共通してゐた俳諧趣味や、俳道に志してゐた人々に一貫してゐた書風の妙味は、容易にこれを知り得る機會がなからうと思ふ。俳諧は漢詩や和歌とは異なり、民衆の共有物であつて、如何なる階級の者でも、即興的にうたひ出す種類のものである。その道に關する專門の知識が無い者でも、俳諧そのものの形式が簡單である結果、容易にこれに接近することが出來る。勿論大家には成り難いが、拙（へた）の横好（よここの）きになる位なこ

とは、どんな人にでも出來る譯だ。こゝに俳諧が民衆的文學となり得た理由があつたと思ふ。故に民間で何の苦勞もなく、一つの高尚な樂しみ事として書きなぐつてゐた俳句ほど、其の當時の民情を知るに好都合のものは他にあるまいと思ふ。如何なる社會情勢の下に置かれてゐても、如何なる家庭上の惱みに苦しめられてゐても、一種の脫俗的禪味をもつて、自己の餘りにも小さな又餘りにも淺間しい姿を、靜に反省してこれを眺め、これを批評し得るだけのゆとりを心に與へてくれるものは、わが俳諧の道であると思ふ。徳川時代の中葉から末期にわたる間の俳人の作は、この意味に於て、實に善き教訓を我等に與へてゐる。わが一生涯の仕事は爲すべきはその最善を爲し、爲すまじきはさつさと棄てて、かりそめにも我執の念につゆほども纏縛せらるゝことなく、ゆづるべきは他にゆづり、己れ自らは一笠一杖、行脚の旅に自然のふところに晩年を委ね、或は天下到る所に俳諧

の友を訪づれるといつた、その風雅な心構へは、古來、わが日本人のみの持ちうる心であつた。淡々として水の如く澄める心と、然かもその根柢に於て操志鐵石の如きものを藏する日本魂こそは、俳人の日夜理想とした目に見えぬ寶であつた。芭蕉が日本文學者の王座を占めてゐるのは、日本人のこの心構へが芭蕉を通じて最も美しく又最も力强く現はれてゐるからだと思ふ。だが、我等は悉く芭蕉の心境に達し得るものではない。我等は尊敬の目をもつて芭蕉を見あげる。我等の友人は芭蕉ではない。彼は我等の師であり、父であり、又理想の標的なのである。我等の友人は第二流以下の俳人達ではなからうか。

私の生家は越後高田の南方新井と稱する小さな町に在る。祖先以來子子孫孫、數百年間住んでゐた家なのである。上越には俳諧の流行した歷史が相當に古い。連歌師宗祇が文明年間に三回ばかり上越に遊んでゐる。彼が第一回目の越後下りを爲したのは文明十年三月下旬頃のことで、五十八歳の時であると傳へられてゐる。第二回目は同十一年二月のことで、當時彼は五十九歳であつた。春日山城（上杉氏）で伊勢物語講釋が爲されたのはこの時のことであつた。第三回目は同十五年春のことで、宗祇六十三歳の年であつた。由來越後の上杉氏は駿河の今川氏と共に、地方の文化を興すことに熱心であつたから、宗祇招請の結果は上杉氏の家臣や地方豪族の間に影響するところがあつたと思ふ。次に芭蕉の越後行脚の事がある。元祿七年に芭蕉が病歿したそのそもそもの原因は、越後路で病氣した時の衰弱だとさへ傳へられてゐる。越後高田で病氣で苦しめられたことは、こゝで繰返へす必要もなからう。私の家にその有名な「紫陽花や藪を小庭の別坐敷」の筆蹟が、如蘭の祖父喜市郎（宗和）時代（元祿年間）から其他の蕉翁の記念品と共に保存されてゐた程であるから、又芭蕉が『奥の細道』に書いてあるが如く、

越後路に入つてから九日間、「暑濕の勞にて神をなやまし、病おこりて事をしるさず」とあるにも拘らず、元祿二年七月上旬、直江津か、高田か、或はその附近の地で、同伴の曾良を中心として、己が主治醫であつた高田の良醫細川何某や、その他數名の此の地方の俳人を集めて、連句の會合を催ほしてゐる位だから、當時の上越地方に於ける芭蕉尊崇の風が如何に强かつたかがわかる。次に千代尼、闌更等の筆蹟は如蘭時代から私の家に傳へられたものである。如蘭四十五歳の時に千代尼は七十四歳で歿してゐる。如蘭六十九歳の時に闌更は七十三歳で歿して六十四歳の時であつた。如蘭が俳人揮毫折本を机上に備へつけたのは寛政六年のことであつた。そして其の卷頭に先づ第一番に書き出したのは冬日庵泰昌であつた。馬佛、無名庵、春鴻、葛三、二夜庵二世貞松、栗庵二世、玉屑、百崖羅城、暮

柳舍、岡崎如毛、田禾（文化年間に於て關西第一の俳人の稱あり、廣島の人、飯田篤老）等は此の帳に揮毫した俳人中の代表的人物であつた。

次に如蘭の後を承けて卷石が編んだ遺墨集には、先代の集めたものをも數種含めた關係から、年代はまちまちであつて、その俳人の數も非常に多くなつてゐる。天明四年の其日庵二世の素丸の序の言葉を筆頭に、其日庵五世、桂洲（白芹）、佳日庵德布、其日庵四世野逸、鈴木甘井、大雅堂二世月峰、暮柳舍二世後川、上田馬來、太田可笛、麥二、暮柳庵三世車大、以南（良寛の父）、中山眉山、闌更（半化房）、無名庵第四世井上重厚、岩波午心、馬肝、時雨房一草、有無庵羅堂（五芳）、去來庵宗讃、垣見巴凌、高城都雀、閑田子（伴蒿蹊）、蝶夢、四時堂志諺、八千房、不二庵（二柳庵）、奇淵、梅之室宗匠、其成、蘆涯、江森月居、三駱、其日庵白露、南無庵北亭（嵐外）、素白、無外庵既白、玄武坊、鳴立庵雉啄等合計

約二百數十名に達してゐる。

以上其數約三百名に達する俳人中、中央で名を知られた師匠株の者は百五十名内外であつて、他の百數十名は所謂田舍の俳諧の宗匠達であつた。故に此の遺墨集は俳諧の歴史の上から見るならば地方色を主としたものである。玉石混淆の中に當時の俳諧道の諸相を如實に露出してゐるところが却つて興味ある點だと思ふ。特に揮毫者はいろいろの派に屬してゐることと、その師匠株が弟子達を自ら率ゐて私の家へ來てゐるか、或は自ら紹介の勞をとつて私の家へ同門の俳友を立寄らせてゐるところに、名狀し得べからざる師弟愛の美しさを見出すのである。

私は此の記念の遺墨集を私の筐底にいつまでも奥深く藏して置くことが、私自身にとりて却つて祖先追憶の精神に合致する所以であると考へてゐた。だが、私の友人や又未知の俳諧研究者等から、これを出版したならば、斯道研究者にとり

て今日迄埋れてゐた研究資料を提供することにもなるのだから、言はば、廣い意味に於て、祖先供養を爲すことにもなるのではないかとの勸告を受けたので、多少其の心にもなつた。それに加へて、湯川弘文社書店の湯川松次郎氏からも熱心な勸誘を受けたので、終にこれを上梓することに決した。しかし私は元來俳諧を作つたこともなく、俳諧の歴史を學問的に研究したこともなく、たゞ極めて廣汎な立場に於て、文學の一部分としてこれを觀察し、又折々味つて樂しんでゐた位のものである。或は折々必要にせまられて私の專攻の英吉利文學の短詩形と俳句の形式を比較して、この兩者の間に横はるところの、兩民族の思想感情の、その表現上の異同を知ることに努めた位のものである。故にたゞそれだけの知識で此の三百名に垂んとする俳人の遺墨を整頓して書物に編むといふことは、私にとりて大きな仕事であるのは最初から十分わかつてゐた。しかし、私はともかくこれ

を成し遂げることを約した。だがいよいよ着手してみると非常に困難であることを知つた。先づ第一に苦しめられたのは筆蹟を判讀することであつた。歌人とは異なり俳人の筆蹟は實に千態萬樣で、且自我流のものが多く、正統な書風や書體に準據したものは寧ろ少數である。特に俳人一流の假名遣に依つて、無造作に書きなぐつてゐるので、文法を無視したものは相當に多い。私はこれを妻と共に日夜一つ一つ判讀するのに馬鹿々々しい位多くの時を費した。そして讀み破つた結果、存外くだらない句であることを知つたこともしばしばあつた。それになほ無駄な仕事だと思つたのは筆者の實名や傳記の調査であつた。俳人はたゞ雅號のみを書くくせがあるので實に後世の人は迷惑する。それも芭蕉だとか、千代尼だとかいふ一流どころの俳人のものならば、誰でも一見して解かるが、田舍の行脚俳諧師の雅號ときては、調べてみる手がかりもない。況やその傳記に於てをやである。しかしこれも私はくだらないこととは承知しながらも、私のもつて生れたこり性から十中八九までは調べあげた。それにしても私になほ判讀し得なかつた句や、雅號や、又傳記未詳のものは決して少數ではない。是等は今後更に調査してみる心組でゐる。

私は多年私の專門の英吉利文學を研究して來た經驗からいふならば、大文豪の作品のみを如何に深く研究したところで、其の文豪の眞の姿がわかりかねるものであると考へてゐる。それ故にこそ近來英吉利文學の研究方法に一大革命の機運が、英吉利以外の國から起きて來たのである。例へば沙翁一人の作品に就て、否、その三十有餘の作品中の僅に一つか二つだけを取り出して、如何に深い研究をやつたからとて、それで文豪沙翁の全丰が解るものでもなく、その時代の文化の全般が解かるものでもない。それには沙翁を中心として常につきまとつてゐた

大小の衞星を調べてみる必要がある。近年英吉利文學研究の方向が、第二流及それ以下の文學者の作品に向つて進められて來たのはこれが爲である。一人の大文豪が出てくると、其の流を汲んだ同門の中から大小無數の文學者が出てくるのは、啻に英吉利文學のみには限らないと思ふ。わが俳聖芭蕉の場合の如きは恐らく門人の多かつた點で世界第一であつたと思ふ。故に是等無數の蕉門の弟子達の、その存外つまらない弟子達の作品でも、これを一通り檢討することに依りて、芭蕉その人の眞の姿が比較的に公平に知り得るのではなからうか。その意味に於て私は、私のこの小さな遺墨集が、俳諧發達史の研究者に何物かを提供するであらうことを私かに期待してゐる。

本書所載の遺墨中調査未了のものが可成り多い。此等は將來讀者諸賢の御垂教に依りて速に解決し得るならば、私にとりて望外の幸福である。終りに臨んで私の

鄕里出身の俳人の傳は、私の甥の金子以策が主として調査してくれたものであることをこゝにお斷りして置く。

昭和十八年三月十日

東京市外　小金井町
櫻居山莊　編　者　識　之

目次

「遺墨控書」より

千代尼……四九
浚明……六
半化坊（蘭史）……八
蒼虬……三
以南……一四
丈雲……一八
由之……二〇
蓮阿……二〇
良篤……二三
一茶……二六
馬琴……二九
萬里……三〇
柳々庵……三一
逸調……三三
五竹坊……三三

「百と勢の朝」より

冬日庵泰昌……三四
牛盧……三五
牛丘……三五
三圭……三五
松羽……三五
風狸……三六
溯舟……三六
阿藏……三六
吾柳……三七
時來……三七
祖明……三七
柳左……三七
無名庵……三八

春鴻……四〇
葛三……四二
宇呂……四二
馬佛……四四
半日亭……四五
吳山……四六
松井……四八
貞松……四九
玉屑……五〇
成淵……五四
夫成……五五
宴池……五六
何有……五八
羅城……六〇
宗古……六二
北金坊……六二
卜來……六三
哥咏……六三
桃流……六三
羅門……六四
花港（遊）魚亭……六五
暮柳舍……六六
青岐……六八
秀鷹……六八
耳順闌……六八
來船……六八
物外……六九
一醒……六九
二竹……六九
灣夫……六九
長省……七〇
如毛……七一

花叔……七三
登里……七四
漁村……七五
舍風……七六
鹿古……七七
田禾……七九
一中觀子阿……八二
指方……八二
置非……八二
逸菊……八二
長茂……八三
希也……八三
清雅……八三
鑾彬……八三

「越荒井庄拳石編」より

序……八六
素丸……八七
咫徑……九〇
桂洲（白芹）……九〇
德布……九一
茂楓……九一
野逸……九二
岐東……九三
野鶴……九四
瓢落……九五
指方……九六
祖明……九六
風狸……九六
文中……九六
和童……九六
三居……九七
曳尾……九七

攀遠……九七
闌尾……九七
荷篠……九七
狂雅……九八
放齋……九八
文弄……九八
援左……九八
桃路……九八
闌長……九九
素語……九九
青錢……九九
荷沙坊……九九
江水……九九
松故……一〇〇
もりかせ……一〇〇
延雨亭……一〇〇
之室……一〇〇
紫綱……一〇〇
雨柳……一〇一
舟山……一〇一
加英……一〇一
信翁……一〇一
天魚……一〇三
宋井……一〇四
甘……一〇五
闌臺……一〇五
菩山……一〇六
獨歩……一〇七
月峰……一〇八
孤峰……一〇九
後川……一一〇
馬來……一一一
松菊……一一二

ふん（女）……一一三
巨井……一一四
野柳（女）……一一五
丹霞……一一六
怡水……一一六
麥秀……一一六
都山……一一六
楓原……一一七
古佛……一一七
竹茂……一一七
自德……一一七
素檗……一一八
文輔……一一九
可笛……一二〇
尼俚花……一二一
井々……一二二
三机……一二三
雲帶……一二三
泉明……一二三
月草……一二三
甫尺……一二三
和量……一二三
素有……一二三
烏曰……一二三
金毛……一二三
車大……一二四
鬼入……一二五
麥二……一二六
眉山……一二七
牛行……一二八
重厚……一二九
東蘿……一三〇

葛三……一三〇
貞松……一三〇
訪言……一三〇
瓜坊……一三一
然……一三一
今……一三一
以……一三一
阿藏……一三一
關更……一三一
吳曉……一三一
李月……一三一
山古……一三二
馬肝……一三二
石闌……一三二
午心……一三四
一草（時田房）……一三五
焙泉……一三六
菊明……一三六
御風……一三六
雨月閑人……一三六
袁丁……一三七
半瓜……一三七
福井市隱……一三七
順之……一三七
一樹……一三七
宗讃……一三八
五芳……一三九
寸來……一四〇
市川團十郎……一四一
巴凌……一四三
都雀……一四四
閑田……一四六
文溪……一四八

野嶠……一四八
悅懸……一四八
儲香……一四八
椿三洞……一四八
雪窗……一四九
栗門……一四九
羽積……一四九
志諺（四時堂）……一五〇
八千房……一五一
不二庵（二枸庵）……一五二
奇淵……一五四
梅之室宗匠……一五六
其成……一五八
浪華七十五翁……一六〇
呑秋葦……一六〇
蛇鑾……一六一
丈波……一六一
無涯……一六一
白鸞……一六一
不防……一六一
寒洞……一六一
栢巢……一六一
さる堆……一六一
寄人……一六一
梅斜……一六三
潮路……一六三
悔溪……一六三
月居……一六四
蝶夢……一六六
鴉十……一六九
鬼工……一六九
北金坊……一六九

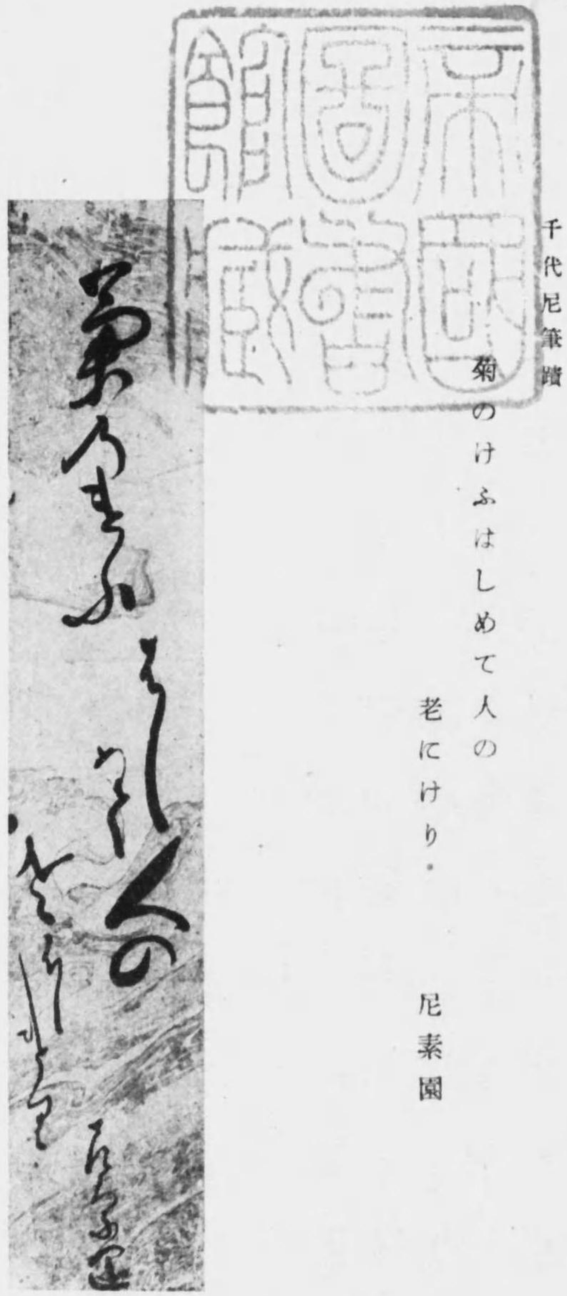
宗古……一七〇
露夕……一七〇
耕淵……一七〇
雪峰……一七〇
湖仙……一七〇
斧休……一七〇
瑕泉……一七一
多夕……一七一
自石……一七一
卵鳴……一七一
風逸……一七一
魚洲……一七一
鯉北齋……一七二
龜淵……一七二
蘆涯……一七二
李三……一七二
可笑……一七二
南臺……一七三
梅布……一七三
雪泉……一七三
水落……一七三
幻夢……一七四
白露……一七五
三駱……一七六
青岐……一七七
嵐外……一七八
素白……一八〇
不墨……一八一
夢幻斗入……一八二
示芳……一八二

魚都里……一八二
ら万人……一八二
蘇山……一八二
士祥……一八二
貞秀……一八三
鷲中……一八三
飲河……一八三
甘雨……一八三
那久彌……一八三
左角……一八三
無外庵（氏白）……一八四
蘭叢……一八八
一舞……一八八
左琴……一八八
明月……一八九
薇雅……一八九
玉斧……一八九
尺五……一八九
惠古……一八九
知積……一九〇
一聲……一九一
玄武坊……一九二
龜風……一九四
千隣……一九四
羅嵐……一九四
似鳩房……一九四
文梅……一九四
路因……一九四
似水……一九五
北魚……一九五

大賦……一九五
青谷……一九五
露町……一九五
正人……一九五
巴柳……一九六
蹟山……一九七
雉・啄……一九八
雨月……二〇〇
鳥秦坊……二〇〇
宜甫……二〇〇
無底……二〇〇
山夕……二〇一
紅桂……二〇一
松崖……二〇一
安里……二〇二
李完……二〇二
青野……二〇二

以上

俳人遺墨



千代尼筆蹟

菊のけふはしめて人の
老にけり。

尼素園

「遺墨控書より」

千代尼

千代は加賀松任の表具師福増屋六兵衛の女、十八歳の頃金澤の某が家に嫁す。二十五歳の頃夫に死別して松任の生家に歸へる。五十二歳の頃剃髪して尼の姿となり、家事は擧げて養嗣子六兵衛、なをの夫妻に委ねて自然を友とし、俳諧の道に專念精進す。素園、千代尼、素園尼はこの頃よりの稱號なりと云。

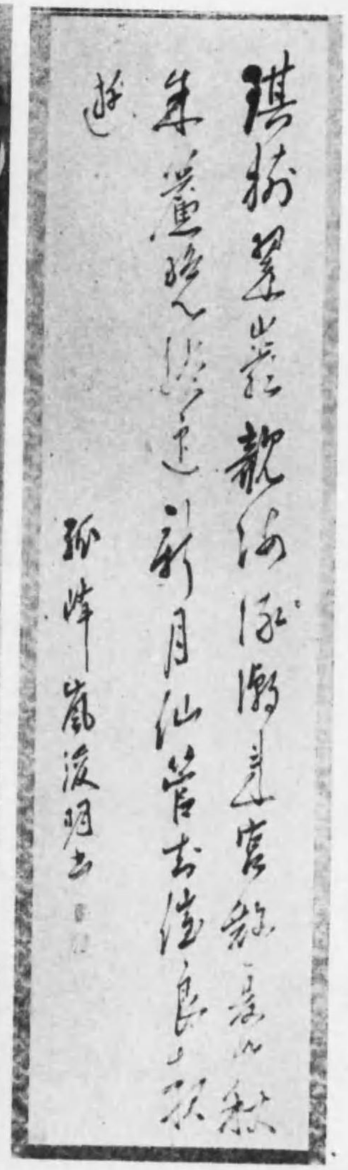
安永四年（皇紀二四三五年、百六十七年前）九月八日歿す、享年七十四。

千代は書を持明院流の山本基庸（もとつね）（加賀の書家、初の名は惟明、前田綱紀に事へ書物役を

命ぜらる、元祿年中命を奉じて京都に赴き、持明院基時に書訣を受く、基時その人と成りを愛し奏請して極祕の書道を傳授し、且つ偏名を賜ひ基庸と改めしむ、室鳩巣に從つて詩文を學び又和歌を能くす、晩年藩主前田利常の逸事を集錄し微妙公遺事と題す、享保九年歿、享年六十九）に學びしと傳へらるるけども、その若かりし頃の筆は極めて流達輕快、然かも晩年の筆全はくこれとは反對に、雄渾豪宕、又枯淡なるが故に、恐らく持明院流以外に五十嵐浚明の書風も加はり、且つ千代尼自身の工夫も多分に加味されしものと推定せざるを得ず。

繪は五十嵐浚明に學びし事は明白なり。浚明の畫風の謹嚴にして且つ氣品の高き筆致が、千代の繪に最も善くあらはる。

五十嵐浚明繪（虎溪の三笑）

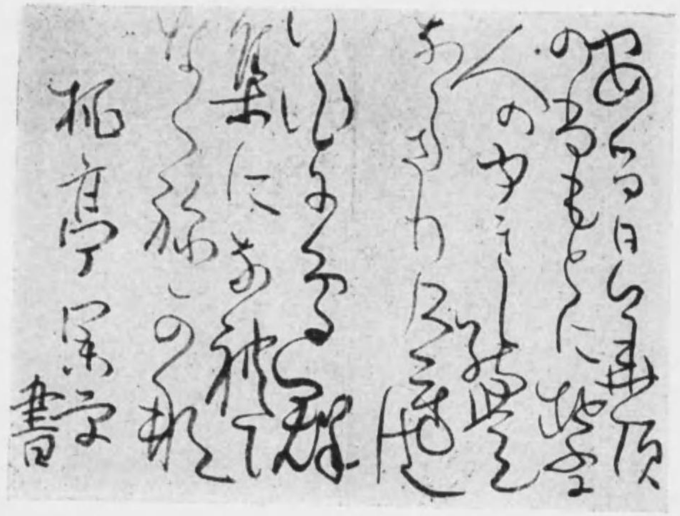


五十嵐浚明書

浚明

五十嵐浚明は新潟の儒者、姓は吳、字は方德（又方篤）、弦峯、穆翁等の號あり、浚明はその名なり、本姓は佐野氏なり、山崎闇齋の門に入り儒學を學ぶ、詩を善くす、又畫に巧なり、江戸に登りて狩野良信に學び、後宋人梁楷、張平山等の遺跡を追慕し遂に一家をなす、山水人物草花に長ず、法眼に敍せらる、天明元年八月十日歿、享年八十二。

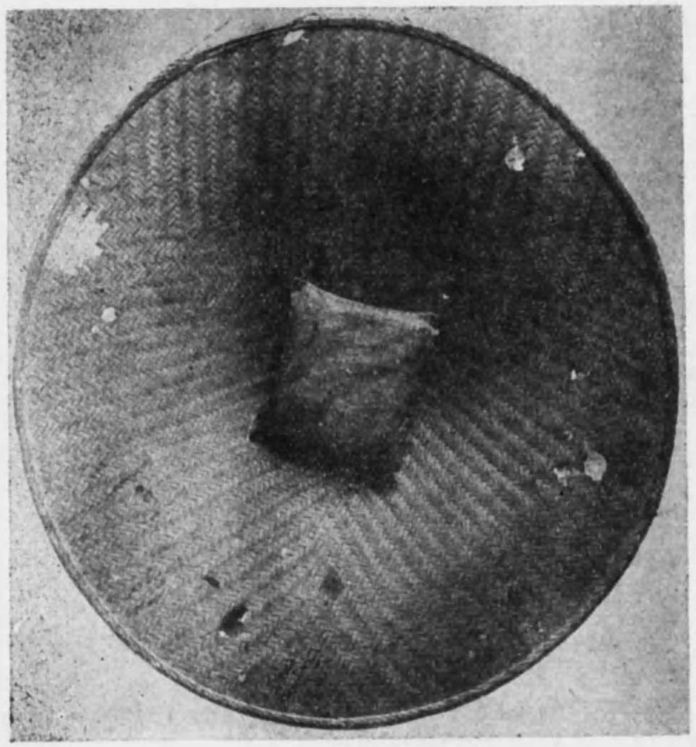
千代は浚明より二歳若かりしが、浚明に先だつこと六年にして歿す。



ある日華頂
のたもとに遊ふに
人のゆきゝの無く
ならさりけれは

花に鳥群
集になれて
なくねかな

桃亭闌更書



千代尼愛用の綿代笠

千代尼と半化坊

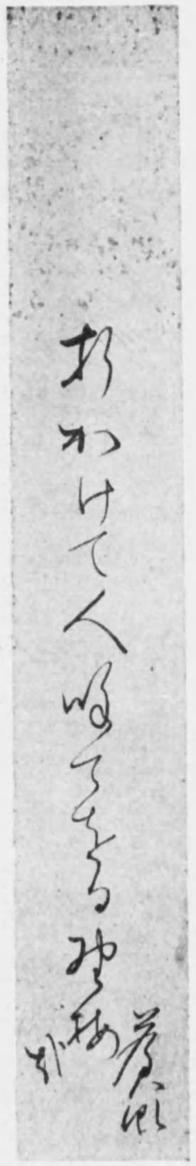
名月や明るいものに行あたり　千代尼

花に眠り花〇〇〇して胡蝶かな　半化坊

半化坊（半化房）又は闌更と稱す。加賀金澤の人、希因の弟子、初め金澤淺野河畔に二夜庵を設けて俳道に精進す。後京都東山雙林寺中に芭蕉堂を築きて之に住す。俳道の棟梁として天下に名を成せしのみならず、書畫に於ても一家を成す。姓は高桑氏、號を半化坊、闌更、二柳庵、南無庵と稱す。寛政十五年五月三日芭蕉堂に於て歿す、享年七十三。千代尼歿後二十四年目のことなり、千代尼歿せし時の半化坊の年齢は四十九歳なり。千代尼との年齢の差は實に二十五年なり。

半化坊は當時曉臺、白雄と共に正風の三傑と稱せられ、その門に集る者無數。著作に雪丸げ（安永四年）、花故事（寶暦十三年）、芭蕉翁消息集（安永三年）、半化坊發句集（天明六年）、芭蕉消息集一卷（天明六年）、俳諧世說五卷（安永二年、天明五年）、俳諧新々式（安永三年）、三冊子（安永五年再版）、有の儘（明和六年）、落葉考一卷（明和八年）等々あり。

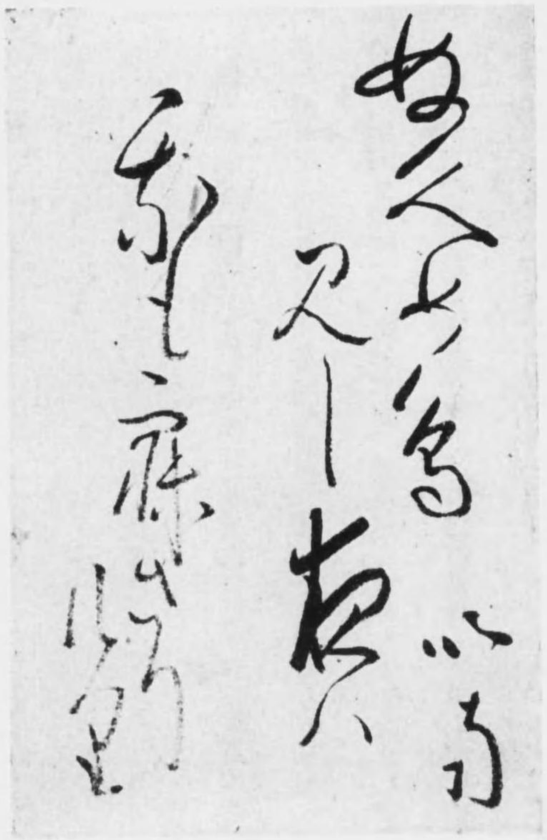
折かけて人呼てをる野梅哉　蒼虬



蒼虬

折かけて人呼てをる野梅哉　蒼虬

闌更の甥、夙に闌更に俳句を學び、後京都に出で師の終焉に侍べりしのみならず、其の遺言をまもりて、芭蕉堂を嗣ぎ、終に天保三俳人の一人として名を成す。加賀の人、通稱成田時二、名は利定、前田家に事へて上士たりしが後故ありて京都に移り住み、二世芭蕉堂南無庵を纘ぐ。蕉門中興の人と稱せらる。後南無庵を退隱して八坂に老を養ひ、天保十三年三月十三日八坂對塔庵に歿す、享年八十三。



以南

ぬくめ鳥
見し夜は
我も寢さり
けり

以南（いなん）（良寛和尚の父）

以南

ぬくめ鳥見し夜は我も寐さりけり

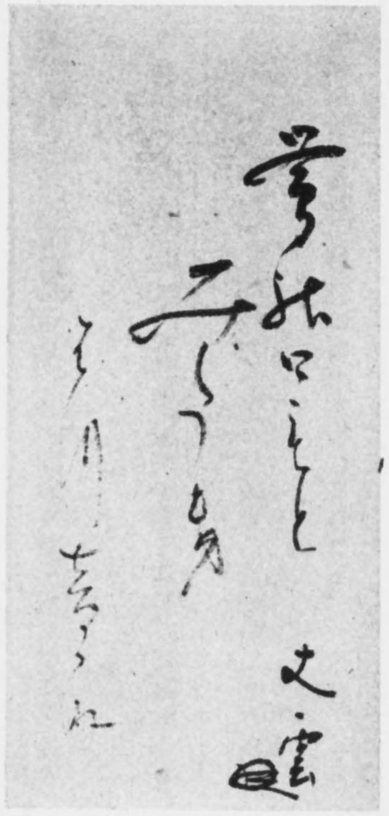
山本以南、良寛和尚の父、越後の勤皇家又俳人なり。名は泰雄、又伊織、通稱左門。越後與板町新木氏の次男、出でて出雲崎の豪族山本新左衞門の養嗣子となる。山本家は橘屋と稱し世々名主兼神職たり。幼より學を好み皇典を修め、後江戸の人木村光枝に就いて和歌を學び、又久村曉臺に師事して俳諧を學ぶ。晩年剃髪して以南と號

し、橘屋以南の名を以て俳人の間に其名を識らる。以南夙に勤皇の志あり、私に郷黨志士と皇室の式微を浩歎し、幕政に不平を寄す。寛政三年三月、家を棄てて京都に上り留ること數年、親しく皇室の式微を見て痛憤措く能はず、天眞錄と題する書を著はし、遂に悲憤の極身を洛西の桂川に投じて死す、享年六十一。實に寛政七年七月二十五日のことなり。（一說に高野山に隱るとあり）、良寛時に三十八歳、これより先二十年既に僧侶となりて父以南と殆ど往來することなし。

以南、良寛及び良寛の弟由之、共に和歌を良くし又書に巧なり。

こゝに掲げし以南の句は、親子の愛情を最も切實に發露せしものにして、以南の父親としての子に對する切々たる情の轉讀者の胸に迫るものあり。後段に掲ぐる良寛の和歌にもこの種の溫情の多分に宿れるを見る。

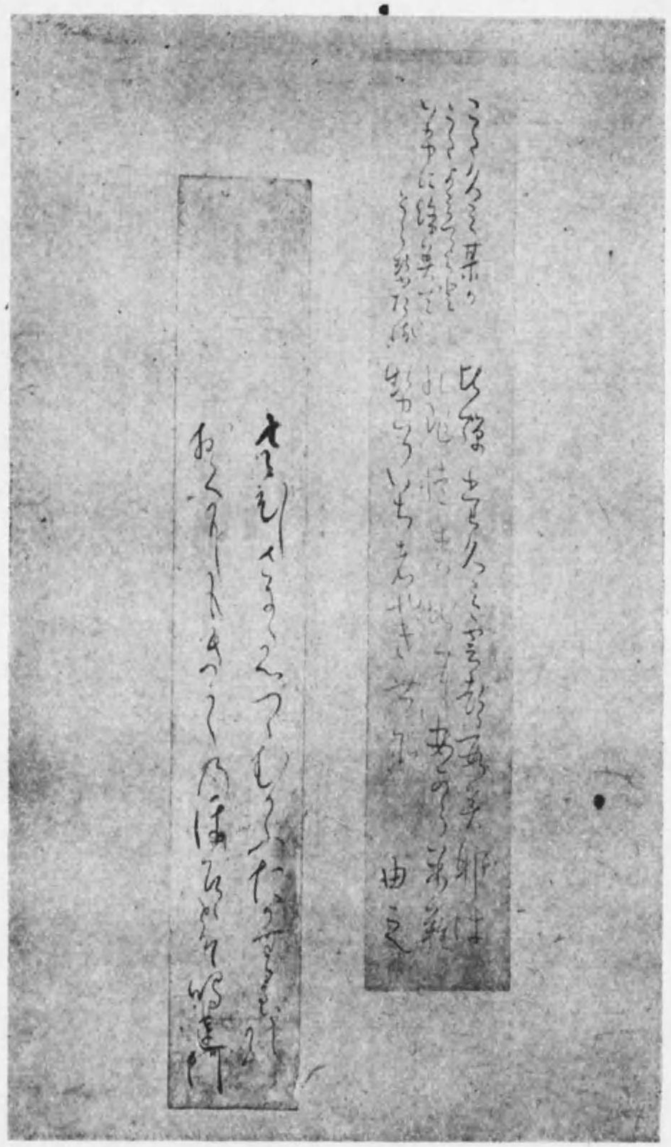
丈雲筆蹟



鶯の口もとみたきはつねかな　丈雲

丈雲

前川丈雲は前記以南が勤皇の志を果し得ずして悲憤水に入りて死せしことを憐み、其の追悼の記念に「天眞佛」を上梓せしほどの篤志家なり、享和元年丈雲七十二歳の時の事なり。



由之筆蹟　　蓮阿筆蹟

由之

こだくみなにがしが　うたよみてよといふに　よみてとらせたる

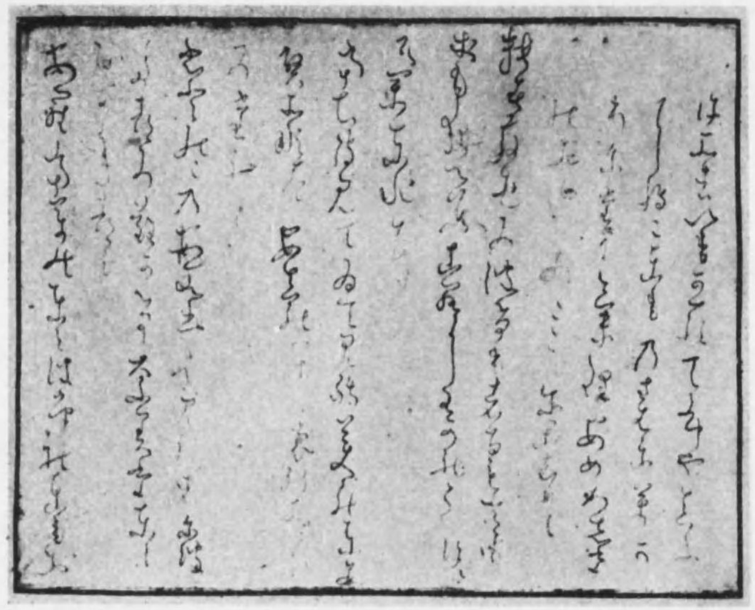
ひだたくみ　うつすみなはの　ひとすぢに　あからめなせそ

由之

由之は山本以南の子、良寛の弟なり、父も兄も家を棄てて家業を繼がざりしをもつて、止むを得ず自ら父祖の業をつぎ、神主の職を勤め、又村の公事に奔走して半生を送る。國學の造詣深く、皇典に通曉し、特に和歌を善くし、亦假名文字の草書に巧なり。父も兄もこの道の第一人者なりしが、由之も亦其の壘を摩するものあり。由之後年家を棄てて僧となる、天保五年正月十三日歿、享年七十三。

〔備　考〕蓮阿の短冊。

蓮阿は浪花の人、景秀、後蓮阿と改め、海月堂と號す、歌學を修め詠歌を能くせしが、亦俳句にも長ず。



良寛筆蹟

和尚良寛

良寛和尚は越後國上の僧、通稱榮藏、越後出雲崎の人、山本以南の長子、十八歳にして尼瀨光照寺玄乘の徒弟となりて僧籍に入り、弟に家を繼がしめ、自ら薙髮して良寛と稱し、大愚と號す。後鄕を出でて備中國玉島圓通寺國仙に從ひ、修行すること數年、又諸國行脚に長年月を費し、かくて二十餘年の後再び越後に還り、國上山五合庵を建ててこゝに住す。後山上乙子祠の傍に居を移し、附近に托鉢して生活す。七十歳の頃篤志家の寄進せし別舍に移り、こゝに住むこと數年、天保二年一月

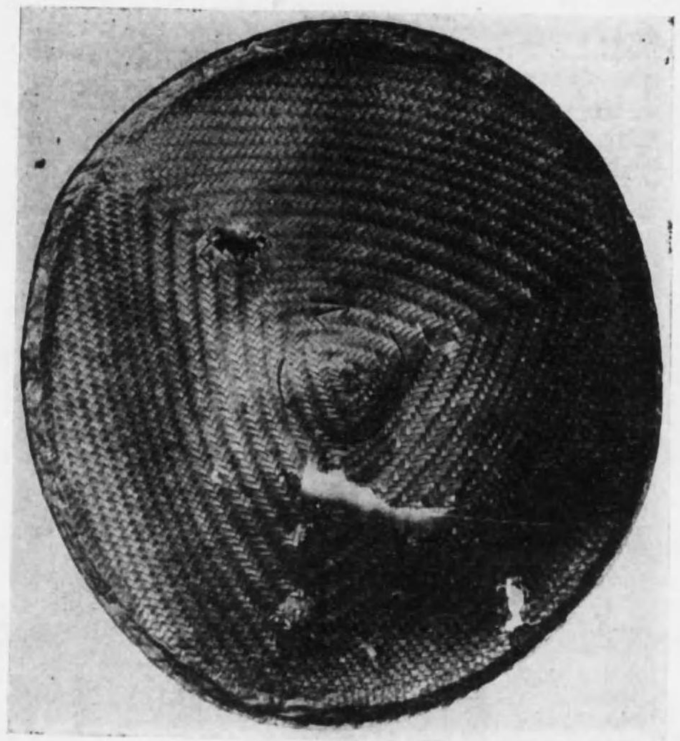
六日病んで歿す、享年七十四。

こゝに掲げし和歌は、天保年中越後に痘瘡流行し、幼兒の死する者非常に多數、良寛これを見るにつけても、天下の親なる人々の心は如何ばかり悲しからむと同情措く能はず、自ら筆をとりて書き下せしものなり。

良寛は和歌に長ぜしのみならず、萬葉假名を草書にて書くことにかけては天下第一の稱あり、亦繪にも巧なり。

こぞはいもがさてふやまふにてこどものさはにまかりにたりけり
あめのしたの　おやのこころにかはりて

あづさゆみ　はるも　はるとも　おもほへず　こらにわかれて
こころまどひに
たちてみつ　ゐてみてみれど　かげぞなき　あまのかるもの
おもひみだれて
ひとのこの　あそぶをみれば　にはたづみ　ながるるなみだ
とどめかねつも
あらたまの　としはふれども　お（以下紛失）



一茶の笠

一茶

畫の蚊やたまりこくつてうしろから

かけ橋の○は○くらし○○の花

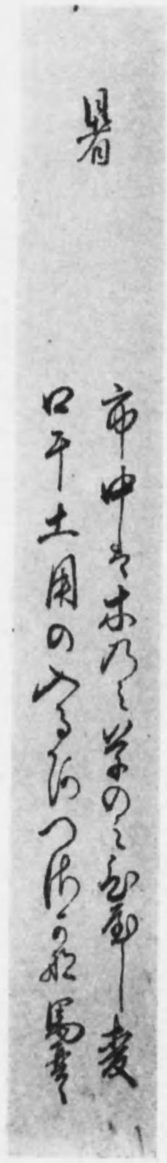
そこらから京か見ゆるか揚雲雀

小林一茶、通稱彌太郎、俳諧寺と號す。寶曆十三年信濃柏原に生る。初め素丸に俳諧を學びしが、後隨齋成美に就いて其の奥に達す。江戸に遊ぶこと十餘年、後柏原に還りて農人生活に晩年を送る。文政十年十一月十九日歿、享年六十五。

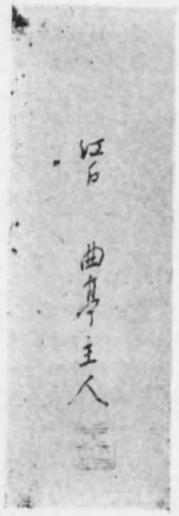
予の親族柏原驛中村氏の宗家は終始一茶を保護せり。

暑　市中は木のみ草のみひやし麥
　　口に土用の入るあつかな　　馬琴

（表）



（裏）



江戸　曲亭主人

馬琴

曲亭馬琴は狂歌、俳句共に餘技として長ずるところあり。

瀧澤氏、名は解、字は瑣吉、倉藏、後淸左衞門と改む。晩年剃髮して篁民と稱す、號は曲亭馬琴、著作堂、簑笠漁隱、玄同陳人、魁蕾子等と稱す。八犬傳は文化十一年に筆を起し天保十二年に成る。この間實に二十有八年、嘉永元年十一月六日歿、享年八十二。

俳諧は會田吾山に就いて學ぶ、俳諧歳時記の著あり。

越後魚沼郡鹽澤村の豪商又文人鈴木牧之（北越雪譜の著者）と親交あり、牧之は亦蜀山人、圓十郎（七世、白猿）とも俳諧の友たり。

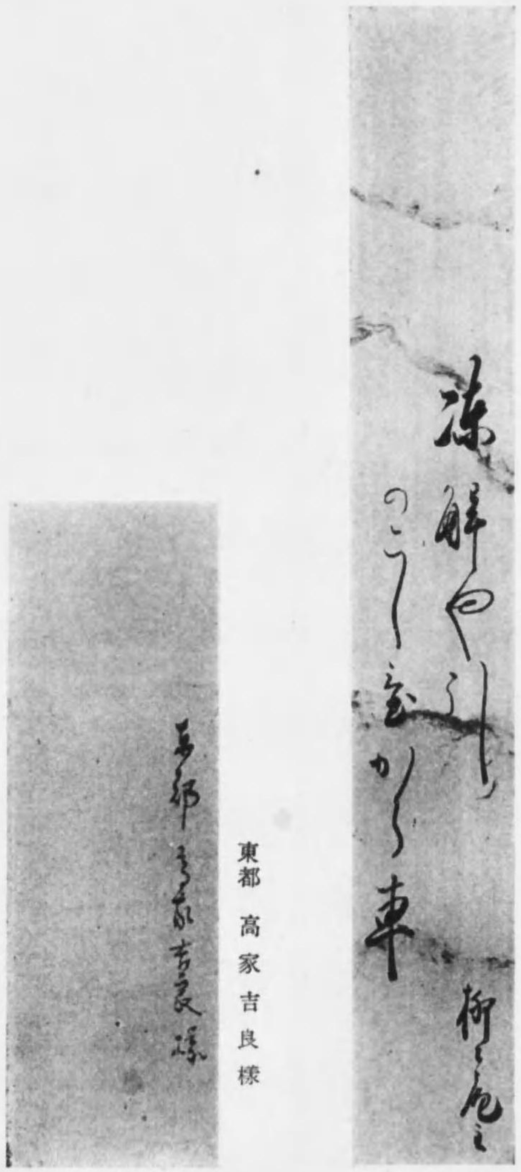
萬里筆蹟

臼に尻
かけて
手の明く
きく見かな

太田萬里は芭蕉門下の高足と呼ばれし杉風の流を汲み採茶庵四世と號す。

柳々庵筆蹟

凍解や引のこし置から車　柳々庵

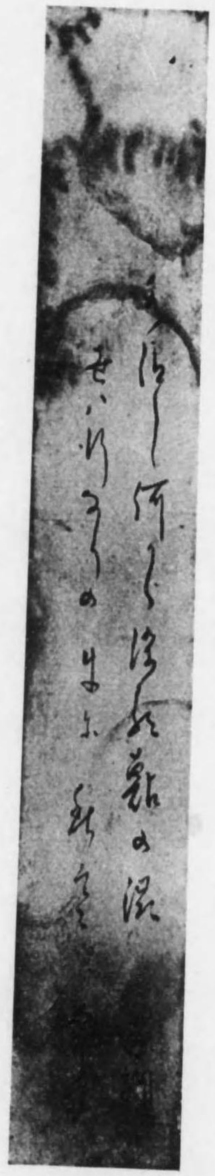


東都　高家吉良様

五竹坊筆蹟

水清し何から染る鮎の瀧　逸調

世は行なりの牛に秋寒　五竹坊



五竹坊は美濃の俳人田中東伯のことなり。支考の高弟蘆元坊の門下にして琴左、歸童仙等の號あり。十二夜話等多くの著あり。

百と勢の朝

金子如蘭

百と勢の朝

予の先代金子平六郎大行（如蘭と號す）俳諧を好み、寛政五年（皇紀二四五三年）の冬、芭蕉百回忌記念の句碑を庭園に立て、爾來雅客を請じて常に樂みを共にす、「百と勢の朝」は是等の俳人の揮毫を集めしものなり、表紙は如蘭自筆のものなり、縦八寸四分、横四寸三分、厚九分、枚數七十一、折本にて悉く作者の自筆なり、計六十名揮毫。

その序に次の如くあり、

冬日庵泰昌

別座敷ならぬ廣庭にひとつの石をもふけ　紫陽花の高嶮をきさみたるは　去年の冬　故翁の百めくりを感してのいとなみとそ聞ゆ　あるしを如蘭とよひ　よつきを拳石といふ　されや其風情のゆかしさは　あちさひに蘭の香をくはひいにしへをしのふこころのかたきは　唯石にたくらへむものなし

鶯の鳴ところかやひとつ石

甲寅如月初午　　冬日莽泰昌　泰昌

半廬　牛丘　三圭　松羽

白きより出しか梅のにほひかな　仙臺半廬

蚊やりして草笛遠く聞夜かな　東海牛丘　分露

梅青しいさ葉隠れのひとつかな　信海津三圭　關川舍　三圭之印

饗應の二日出來たりかきつはた　信陽松羽

（松羽は信濃國松代の俳人なり）

風狸　潮舟　阿藏

白きくや窓のともし火奪ふとも　風狸

祖翁の塚のもとにひさまつきて

言の葉のまことと磨とや石の霜　潮舟

秋されは露見に出る都かな　鳥海山人　阿藏

紫陽花や廻れは遠き表門　吾柳

吾柳は越後國頸城郡針の人

紫陽花や朝夕に替る雨のいろ　時來

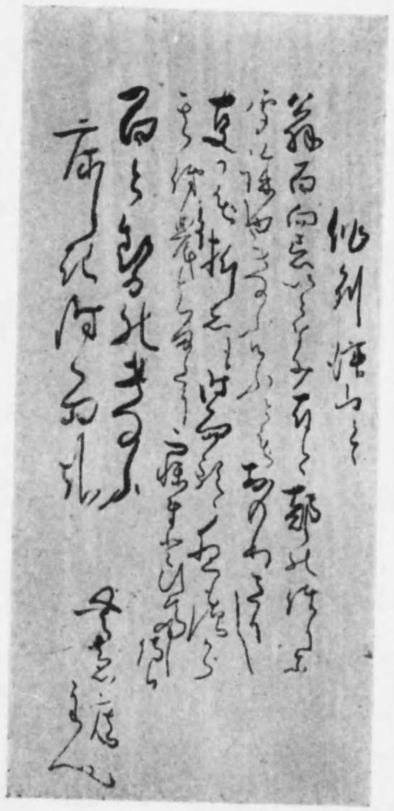
時來は越後國頸城郡新井の人

紫陽花やしはしは見れは寒けなる　祖明

祖明は越後國高田の人

七夕やゆかしき牛の繁捨　柳左

通稱京屋勘平、筑前の人、文化年中



無名庵（大津義仲寺無名庵）

作州津山にて

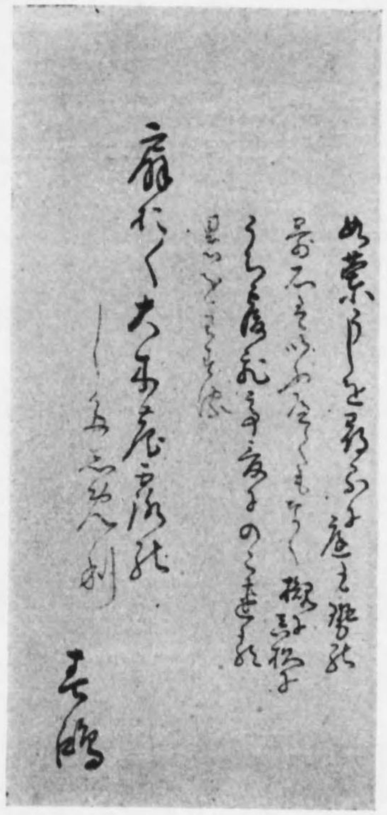
翁百回忌いとなみ有と都の便りに聞　誠や　きのふ　けふとおもわさりし事かも

折しも時雨るる夜もすから　其仏のちまたに寝まとひて侍る

百とせのきのふ

床しき時雨哉

無名庵主人



春鴻

堀口氏、露枰菴、相模の人、白雄の門下、享和三年四月歿。

如蘭うしを尋ぬるに庭もせの奇石はいふへくもなく
槻に眞杉にうち覆ひて　夏にのこれる暑をわする

扇おく大木の露のしたしめり

葛三筆蹟　　宇呂筆蹟

葛　三

倉田氏、相模の人、春秋菴第一世白雄の高弟、寛政六年春秋菴を繼ぎ、翌年相州大磯鴫立菴に入り、鴫立菴第七世となる、文政元年歿す、「筑紫土産」等の著あり。

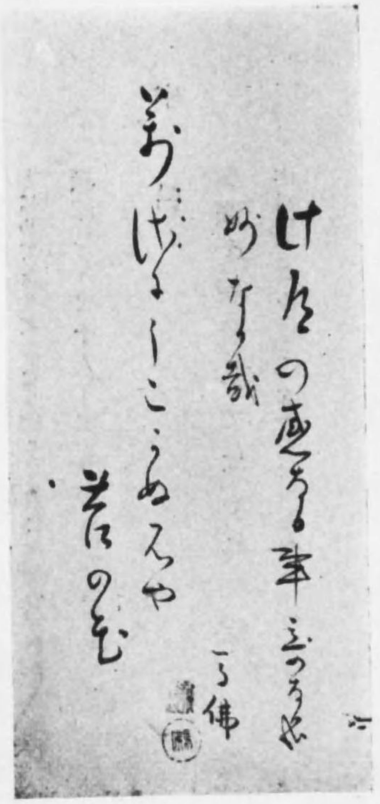
驛長金子氏や　かねて正風荷檐のひととそ承る　されはこそ正風宗師の遺章　石に勒して
園中のかたはら　ひそかにまつり置たり　蒼樹枝をあはせ衆鳥かけをよろこひ顔に　まこ
とにめてたき家居なりけり　爰に殘暑の旅勞をうちわすれつ　しばらく泉石に對していふ
秋涼しくます〳〵水もかれぬなり　葛　三

宇　呂

朝顔や　咲　流　し　て　は　わ　れ　に　俗　江都宇呂

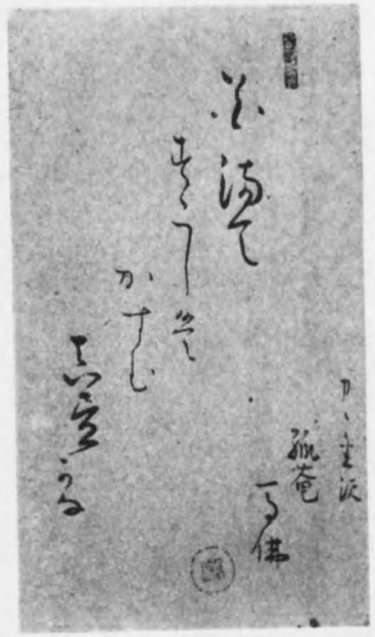
宇呂は江戸の俳人、享和元年「紫關集」の著あり

馬佛筆蹟



此の道の感なる事奇なる哉
妙なる哉

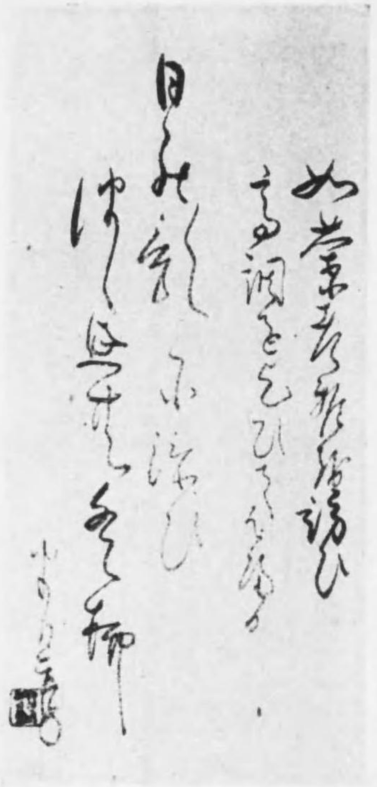
萬代にうこかぬ石や
苔の花



馬佛は加賀の人、文政十二年十一月二日歿、暮柳會希因門下の馬來の門人、孤庵馬佛と號す

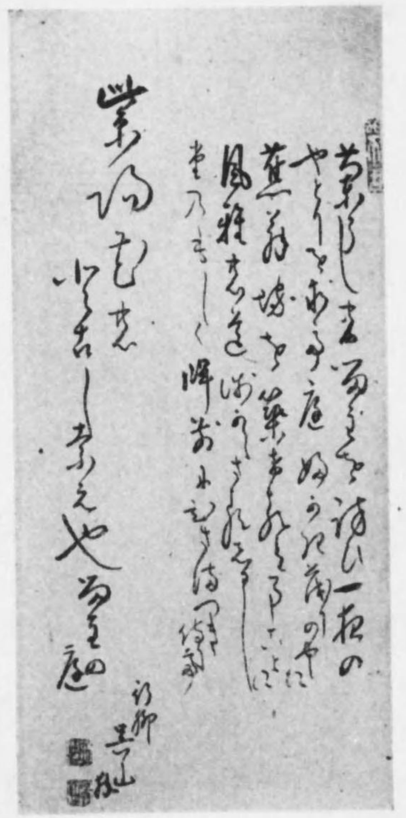
花滿て
すこしは
かすむ
眞晝
かな

半日亭筆蹟



如蘭老雅を訪ひて高調を乞ひてはへる

日の影に添ひつゝ延む冬柳　半日亭



呉山

闌うしの留守を訪ひ一夜のやとりを
求て庭ふかき茂りの中に蕉翁塚を
築けるはまことに風雅の道淺からさ
るしるし。たのもしく牌前にひさまつ
き侍りて

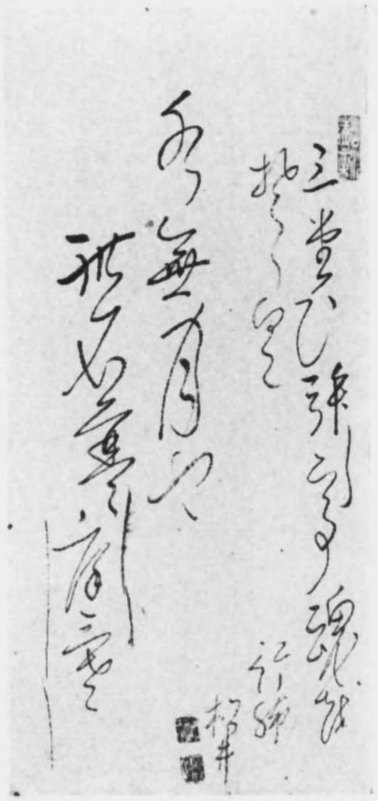
紫陽花の
とこしなえ也留主の庭

呉山は富山の俳人なり、文化六年歿。

三たひ拜して魂をそゝく

水無月や此の石寒し庭寒し

松井は樗良の門人、無爲庵梅左と號す。

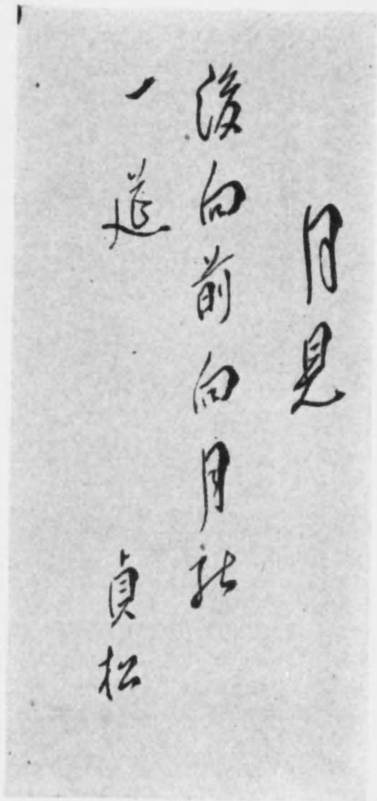


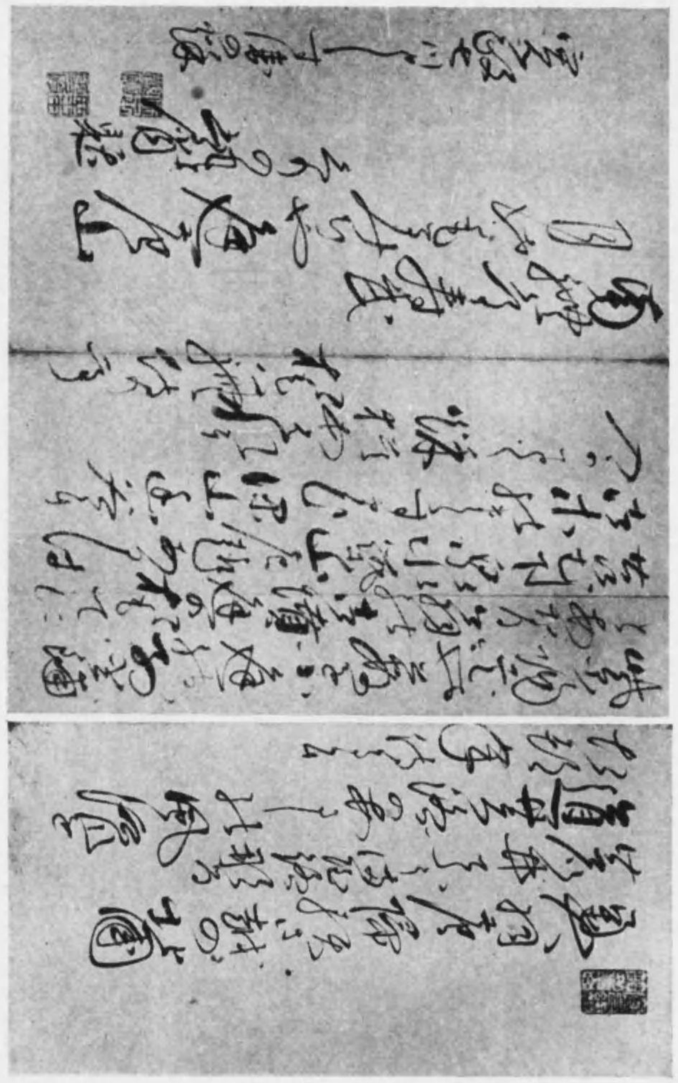
月見

後向前向月の一筵

貞松

弘前の人、寛政十一年十一月十二日歿、享年四十、遠藤氏、蘭更の門人となり、蘭更の後を繼ぎて二夜庵二世と號す。





玉屑筆跡

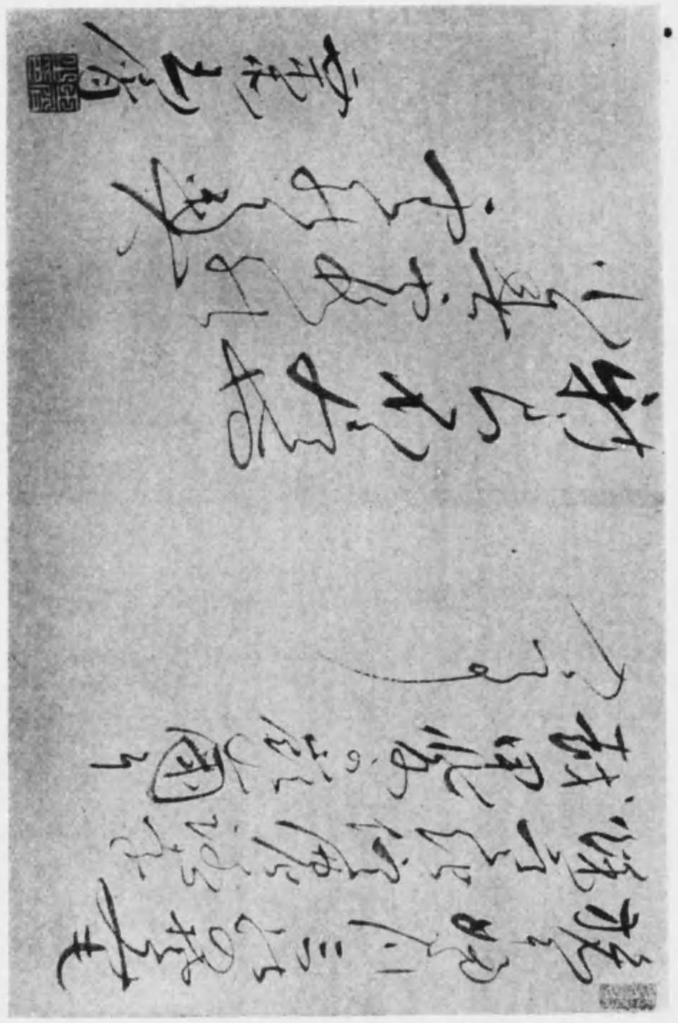
奥羽の歸るさ　越の北國荒井てふうまや路なる道貫洛の　あるしの風流をたつね侍るに

紫陽花の藪を小庭の別座敷とあなる翁の古墳　庭のおもてに苔むして　泉水築山の趣　あるは古木のたたすまひ　深山幽谷に入かことく　秋猶あはれにおもはれ侍りて

なれてすむ月やもみちや庭の山

寛政七つとしする忌の秋

くりもと玉屑題



玉屑筆蹟

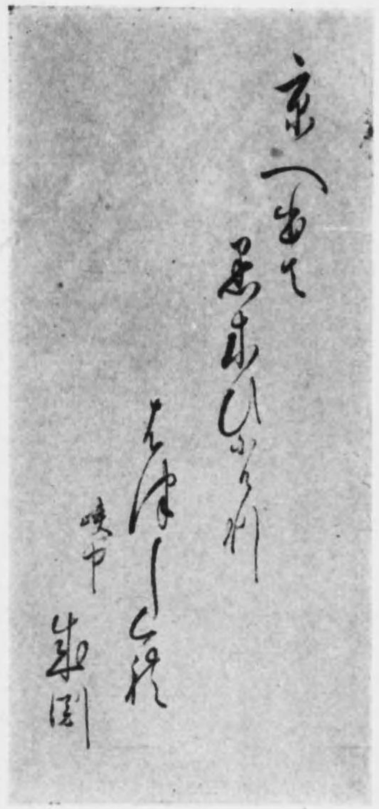
新良不誌や小春霞の宮の原

甲斐のたつ三國にいでゝ秋深き白鷺路を問

栗本玉屑

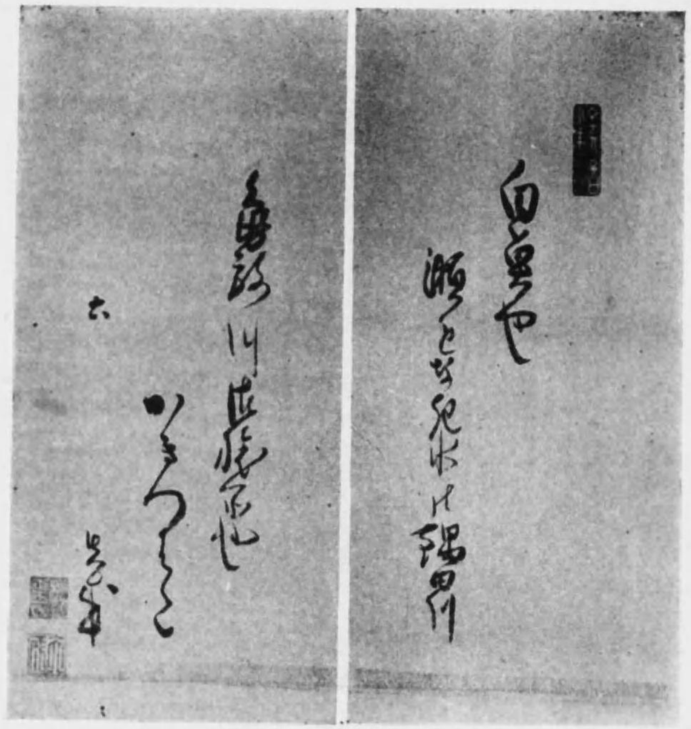
文政十年歿、播州米田村神宮寺住職、青羅門人、栗庵二世と號す、「生松集」「春の光」等の著あり。

玉屑の師匠栗庵一世青羅は播州姫路酒井侯の臣松岡門大夫の子、出でて竹澤喜大夫の養子となりしが素行修らざりしを以て養父歿後、養母の訴に因り藩を追はれ、播州加古川に隱れ髮を剃り、山李坊令茶と號し、善證禪師に參じて青羅と號す、俳諧行脚に出でゝ四方に遊ぶ、二條家に於て栗の本宗匠號を許さる、後復家して舊藩に出入することを許さる、寛政三年六月十八日加古川に於て歿す、享年五十二、蕪村、曉臺、青羅の三名は天明俳風復古の指導者として名あり、特に青羅の技倆は當時天下にひゞく、通稱竹澤鍋五郎、幽松庵、三里坊、栗の本等の別號あり。



京へ出て
黒木得にけり
はつしくれ

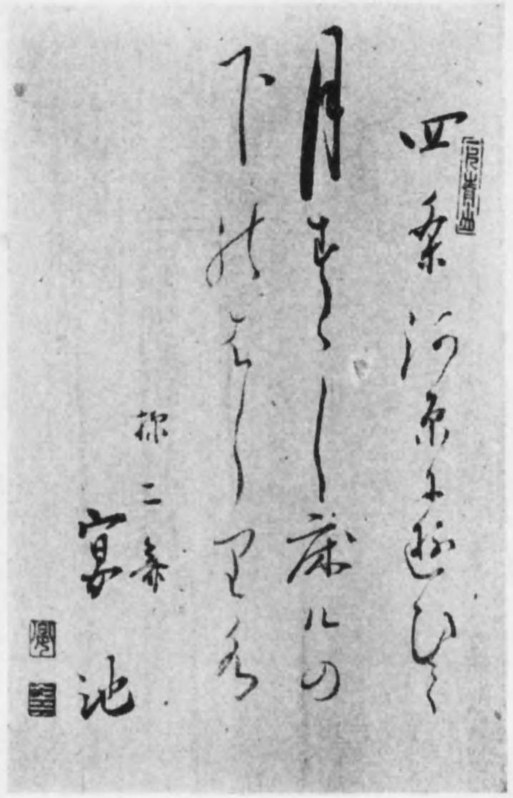
註　黒木は薪のことなり、大原女これをひさぐ



夫成筆蹟

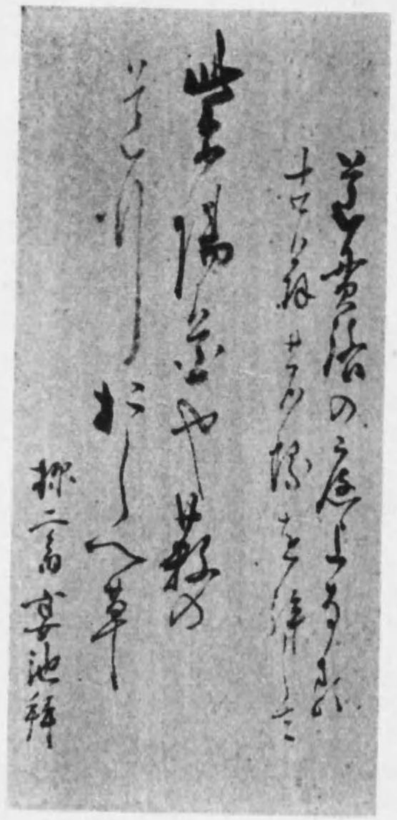
白魚や
瀬もなき水の隅田川

龜放つ御旅所や
かきつはた



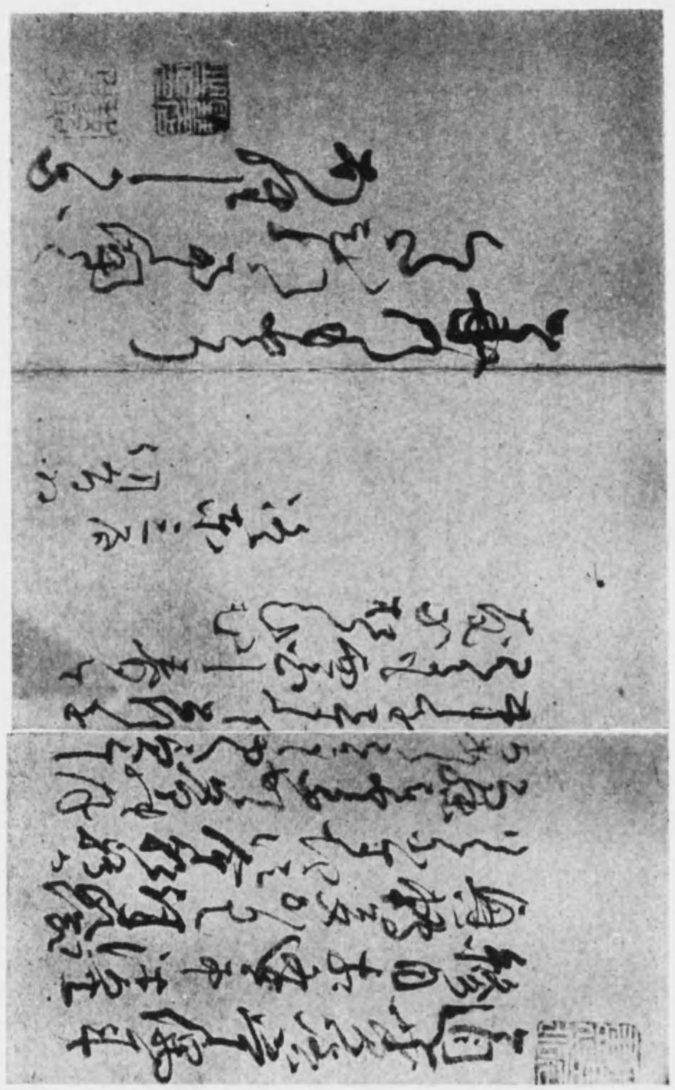
四條河原に遊ひて
月すゝし床几の
下のはしり水

探二齊
宴池



道貫洛の庭上なる古翁の塚を拜して
紫陽花や藪の
道行おしへ草

宴池
倉石氏、越後高田の人、探二齊宴池と號す

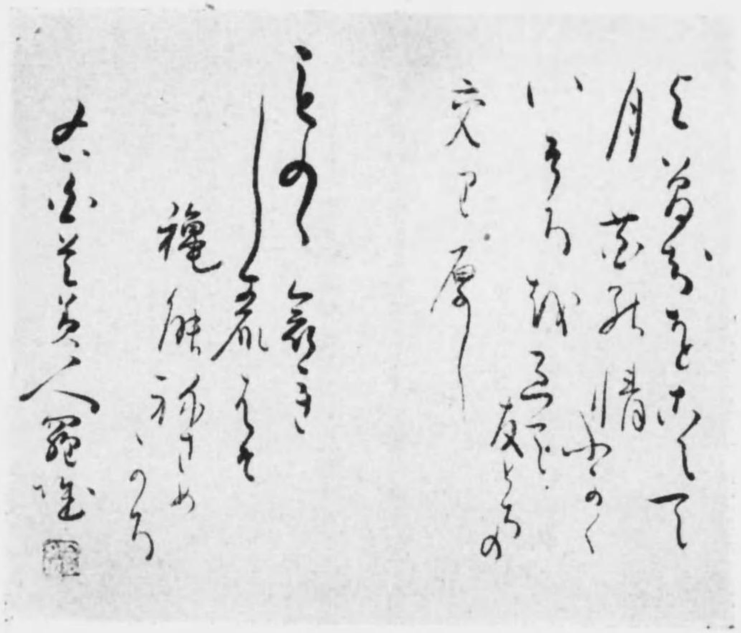


何有書簡

何　有（洛東三谷）

道貫洛宇偶來終日相逢亭清談　興轉多かり　誠風流是にすきす　今朝鶏か寢もとるから
夕日の月か　あらわるるまて　實に事をわすれて　花を見るも面白し　春を友　におくら
む

花のもとにくたひれて聞くあらしかな



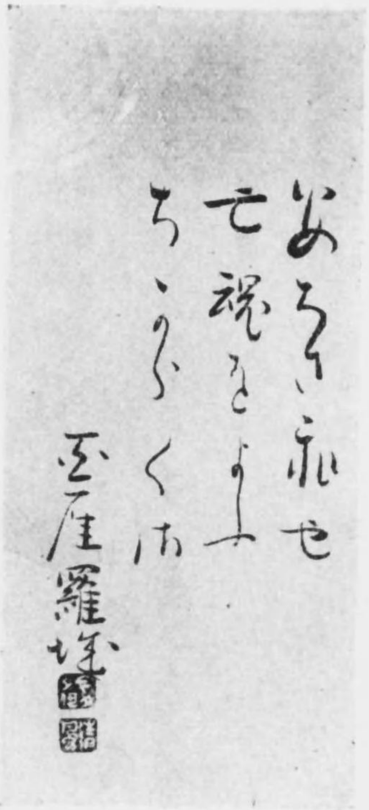
よそちをこして月
花の情ふかく い
そちを過て友とさ
の交り厚し

ものゝ哀れ
しれはそ
秋のねさめ
かな

あちさやひ亡魂をよふちからくさ

百崖羅城

百崖羅城は曉臺の門人なり。名古屋長運寺二十二世住職、名は寂尊、圓珠庵、百崖羅城等の號あり、文化四年十月八日歿、「更科紀行」、「松硯」等の著あり。



宗　古（讃岐丸亀の僧、俳人）

如蘭尊老に初て謁しけるに　衣を引かれて　やとり侍る　老のもてなし　誠に厚き情に

つかれを忘れていこゐ侍る

廣庭や紅葉の古木秋見せつ

北金坊（加陽杜月庵）

雅に富る宿りに春の一時を永く語る

千金に換なん宵を宿の春

卜　來（金城卜來）

風流のもとにたちより侍りて

面白き行野の末の早苗唄

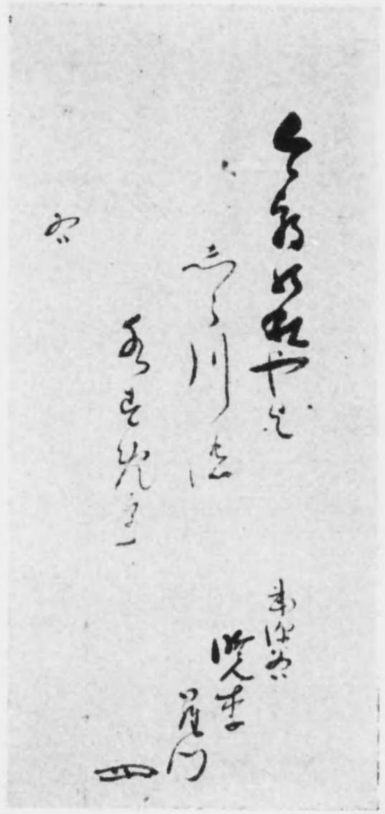
哥　咏（松調舎哥咏）

月朧濤行船の靜なり

桃　流

朝起の雨戸薫るや梅の花

今朝の秋　やよ
　しら川の
　　水すめり

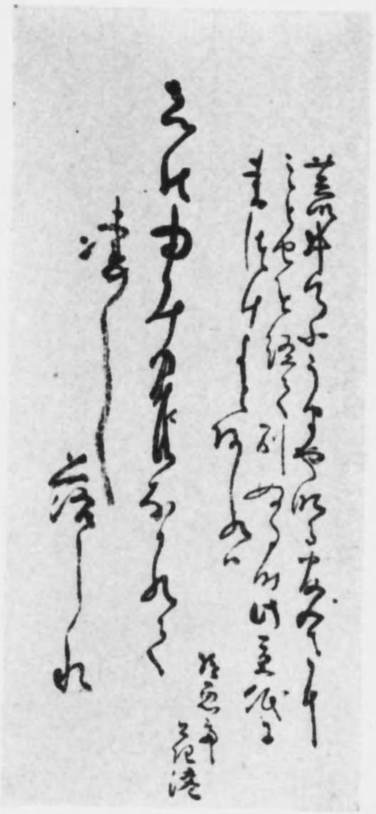


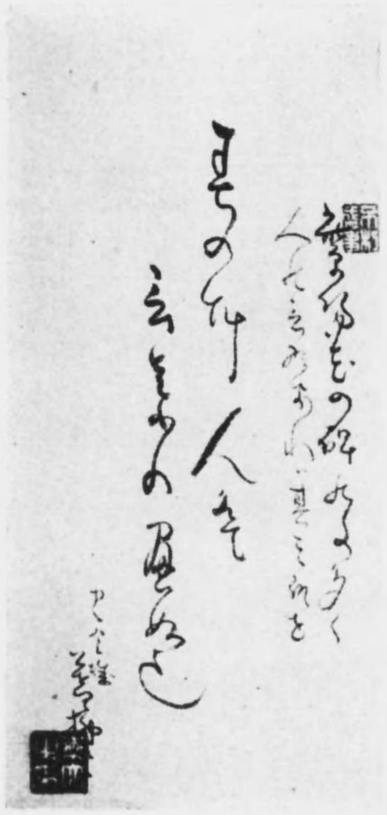
右　武深谷　曉李羅門

荒井てふうまやなる官舎に三とせを經て別ぬる時此の草紙に書つけよとあれは

しのゆみのながれて凄し落し水

（註）しのゆみは篠弓のこと





紫陽花の碑の事多く人の言なせれは其こころを

春の草人は言葉の盡ぬ也

かか金城　暮柳舎[印]

暮柳舎

暮柳舎希因は金澤の人、和田氏、通稱綿屋彦右衞門、北枝、乙由の高足なり、暮柳舎希因と號し、又北枝の號を繼ぎて百鶴園と號す、又黃山舎の別號あり、寛延三年七月十一日歿、享年五十一、門人に麥水、旣白、一菊、佛仙、康工、後川（暮柳舎二世）、珈涼女、涼袋、三四坊、梨一、闌更（半化坊）等あり。

「暮柳發句集」（四卷、後川編、明和三年）、「俳諧百題集」等々の著あり。

（前掲の筆蹟はたゞ暮柳舎の署名あるのみなれば、希因の筆なるか、或は希因門下の筆なるか未詳なり、後にかゝぐる後川、車大の筆蹟參照のこと）

青岐

秋の夜のみたれかかるや露しくれ

青岐は東北遊と稱す、淡路島の人なり。

秀磨

桐下に崩桶見る秋のくれし

耳順蘭

紫陽花や幾百とせの道しるへ

來船

夕風や霞なくれて磯の松

（註　なくれては横さまにそれ行くこと）

物外（東海物外）

下臥につらつら梅の日數哉

一醒（矢さしか浦一醒）

信濃より越後は寒しのちの月

二竹（倚新改二竹）

ろしの戸のきしるは宵の落葉哉

灣夫（加陽灣夫）

主人の齡を聞て

稀の齡眠る日最中や夏木立

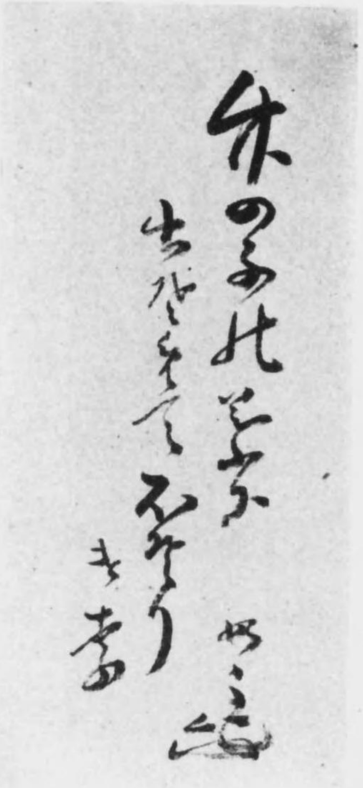
長省（百之丞）筆蹟

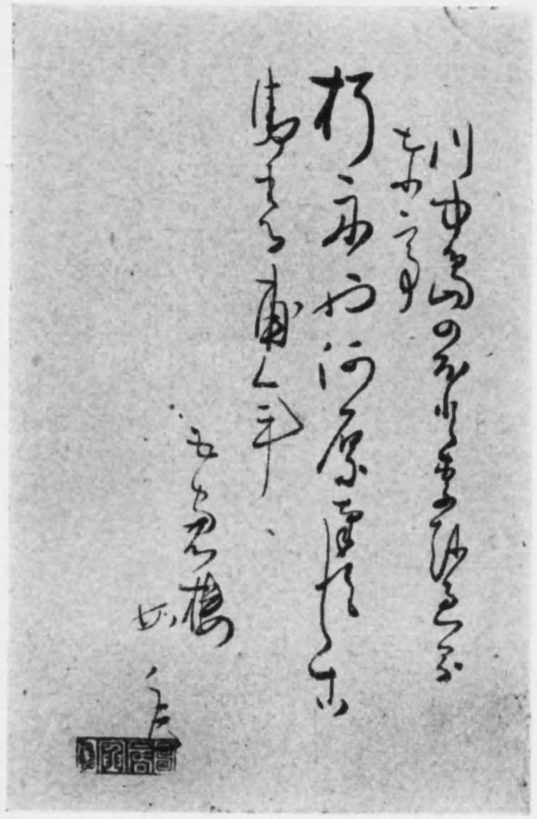
日のもとの
啼かぬうくひす
あはれなる

如毛筆蹟

竹の子の葉に出そめてふとりけり。

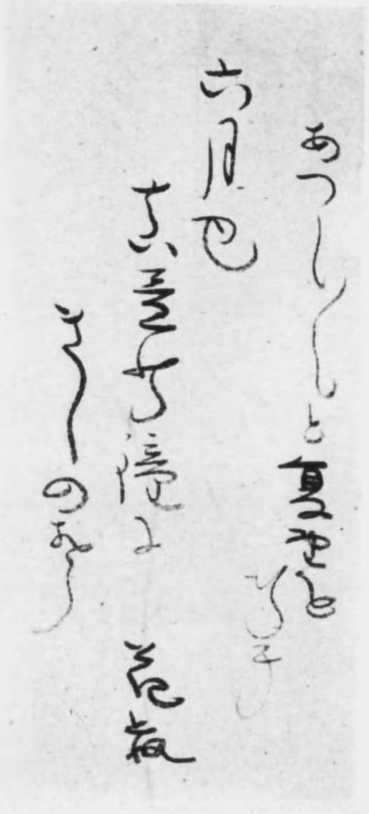
（如毛　岡崎如毛は白雄の門人なり、名は平助、信濃上田の人。）





川中島のほとりを過るとて

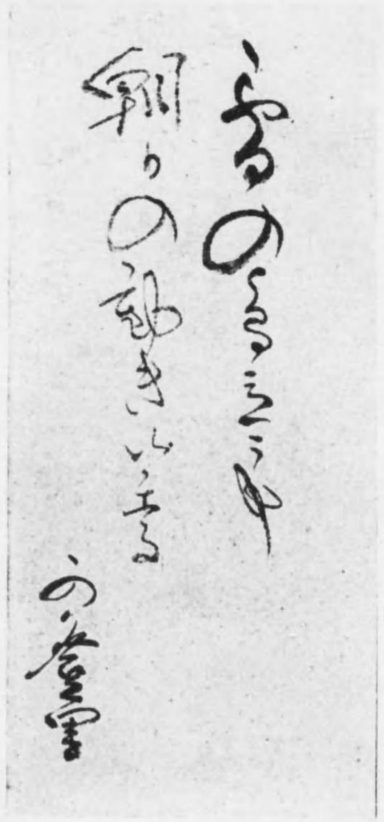
朽舟や
河原なてしこ
馬のほね



あつし〳〵と
夏野を行き

六月や
眞晝の鐘に
きしの聲

花叔
春日氏、橘隱と號す、士朗の門下、文化年中の人なり

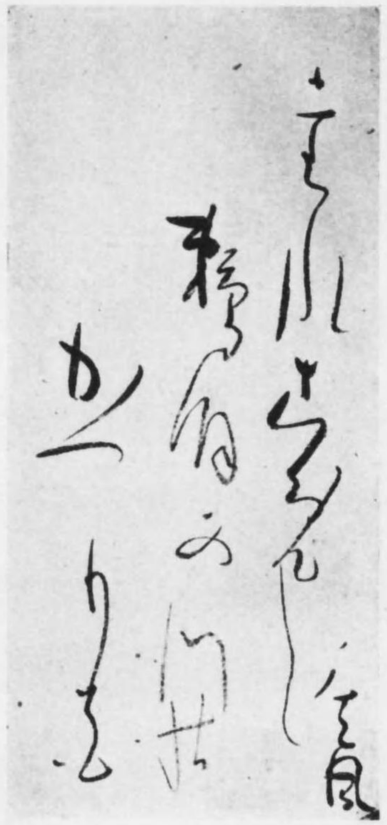


雪の鳥立て
朝日の動きけり
可登里

漁村筆蹟

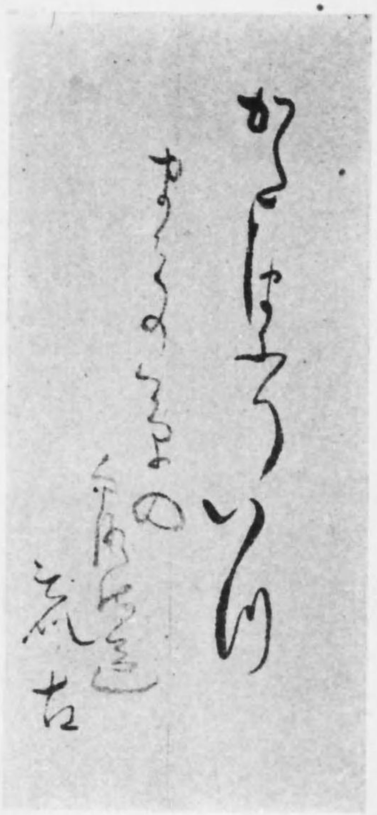
日日の秋おなし
ゆふへは
なかりけり

寢らるゝか
眠ひかも
しらす
きりゝす
漁村



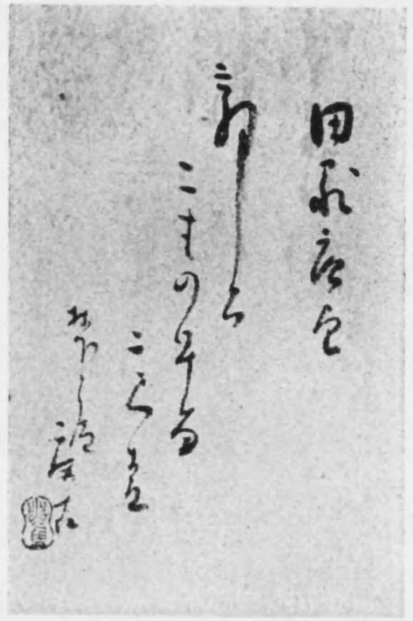
たれこめし
鶏飼か門の
かへり花

舍風



かたつふり
いつまて草の
露の道

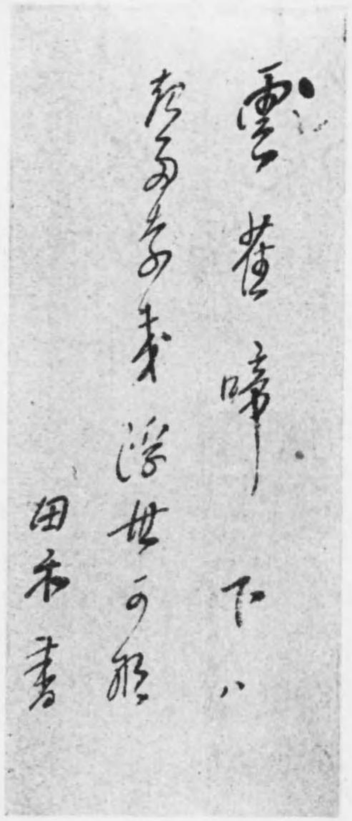
鹿古



田家夜望

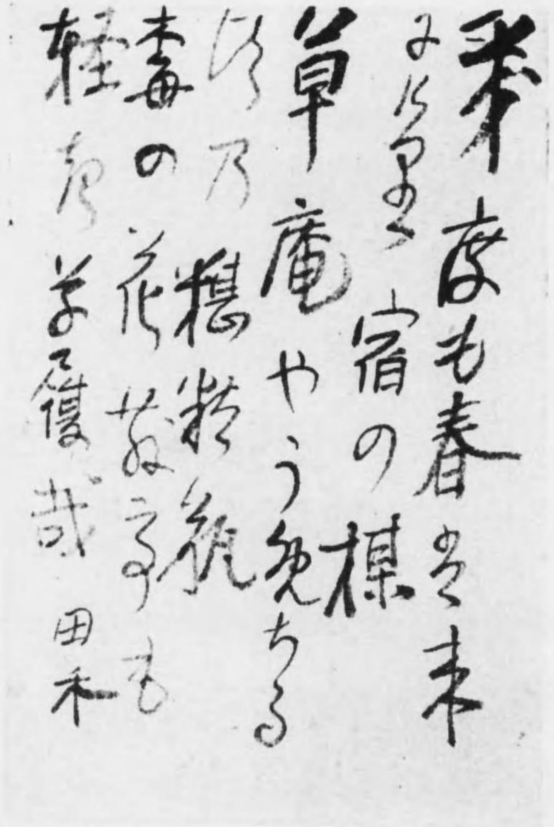
郭公
二寸の早苗
二尺麥

鹿古
淺野氏、金澤の人、
闌更の門人、園亭
鹿古と號す。



雲雀啼下は
きたなき浮世かな

田禾



田禾筆牘

幾度も春は來
にけり宿の楳
草庵やうめちる
頃の猫炭瓶
梅の花散ても
輕き草履哉
田禾

註　猫炭はヌカミソの事なり

田　禾（飯田篤老）

闌更の門人、廣島の人、醫を業とす、飯田氏、名を利矩、通稱完藏、又愃平、篤老園と號す、初め田禾の俳號あり。文政九年四月廿三日歿す、享年四十九、關西に於て闌更派（南無庵）の牛耳を執る。當時關西第一の俳人として名あり。

一中觀子阿

紫陽花のうつり行日をなかめ哉

指方（龍窟）

雪ふるやあたら櫻のちりしとは

置非（五十瀨）

旅の日の大事になるやかきつはた

逸菊

秋雨に秋のこころをおほへけり

長茂

雲相や嘶の多き松の秋

希也（加州）

墻一重波をよけたり鶏頭華

清雅

さはかりの秋は立けり荻芒

驪彬（福永彦左衛門、越後の人、福永十三郎の養嗣子なり。）

ほととぎす鯛もいわしも四月かな

越荒井庄

松問館
金子拳石

序

その友を見て其人を察し　其好める所を聞て其人を知る　越後國荒井宿何某拳石は　數代富貴に居て用を節にし　陶朱公を二人にすといはんに　其性蕉門の風雅をたのしみて　あまた年を經るこそ老後の心得そゆかしかりけり　今年一冊子の句帖をものして　行脚音信の佳章　かつは遠國秀才好士の吟ともを留おかむと企る事　春秋の雨の　徒然を慰るのみにもあらす　善あしを已か句にためして修行の助とせんとかや　誠に螢雪の功せつなるかなや　一たひ逢見ん事をのみ願ふと　かつしかの素丸　其のそみに任せて　はしめ記しつけぬ

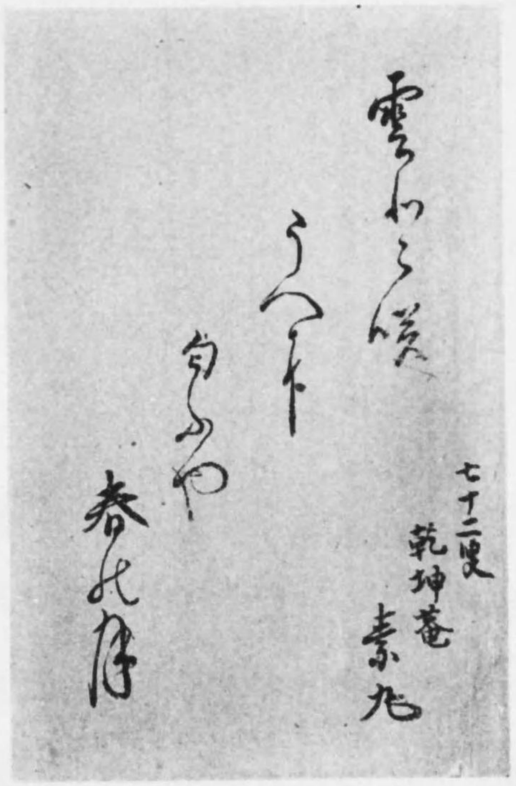
東武葛飾

素丸書　[絢][堂]

干晴天明四

十一月

（此の集は如闌の嗣子平六郎宗證（拳石と號す）の編みしものなり。表紙拳石自筆、揮毫頁數二六七、揮毫俳人二三四名、折本の帙は當時俳人の珍重せし和闌式繪模様の紙を使用しあり。）



七十二叟
乾坤菴
素丸

雲と咲
うへに
匂ふや
春の月

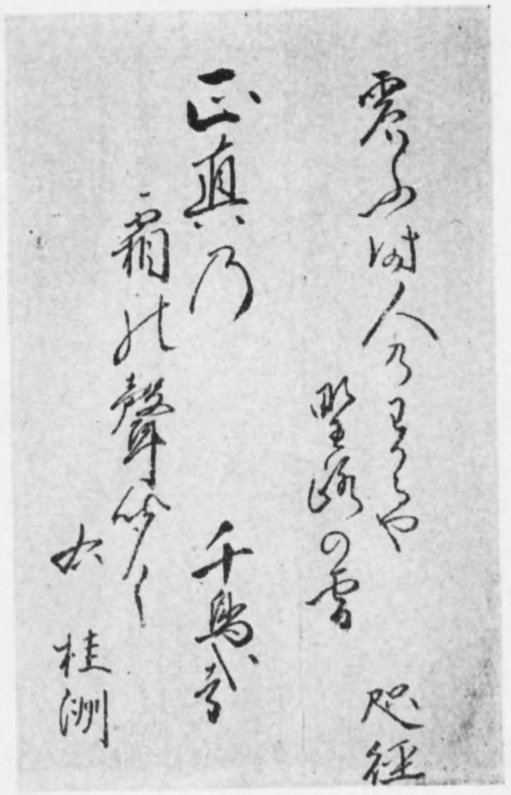
七十二叟
乾坤菴
素丸

素丸

東武葛飾の俳人、三世其日庵、絢堂素丸と稱す、溝口氏、著書多し、次の如し、

又乞食袋、梅のあや、俳諧教訓百種、叢大全、太夫話、馬光發句集、笑つゝけ、夏孟子論、蕉翁發句說、菊苗集、十論裸問答等々

素丸は素堂（季吟門）、馬光の後を承けて其日庵三世となり、その門に多くの逸才を輩出す。



咫徑

震ふ時人のわかるや
野路の雪

正眞の霜の聲聞く
千鳥哉

桂洲

咫徑、桂洲は何れも素丸の門人なり

桂　洲（關根氏）

素丸の門人なり、江戸の人、文化十四年十月二十一日歿、江戸深川靈岸寺に葬る、通稱叶屋三右衞門、號を其日庵、素信齋、東呂子、荷葉、素芹（白芹）、絢堂、五味堂、素水と稱す、其日庵五世となる。

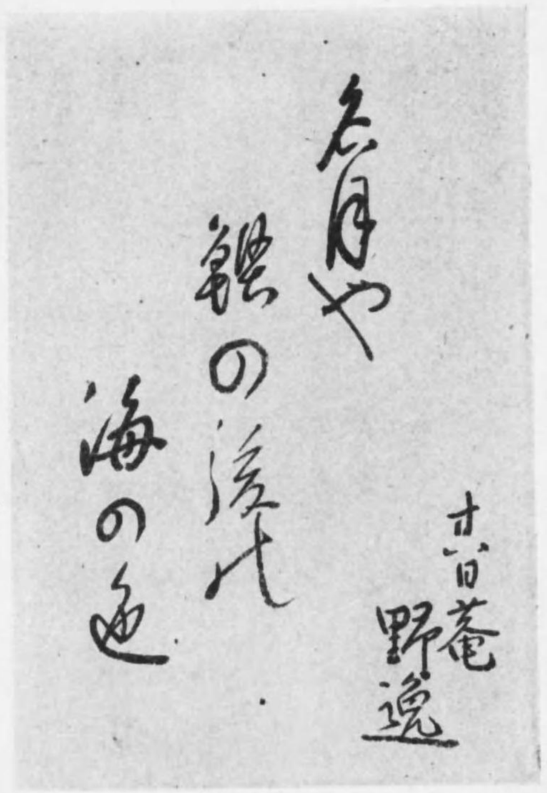
徳　布（横山氏）

素丸の門、絢堂三世、如是庵、又佳日庵、江戸の人、名は重政、通稱重右衞門、著書に「旅のひとつ」、「素丸發句集」等々あり。

聲々に畔を讓りてかはつかな

茂　楓

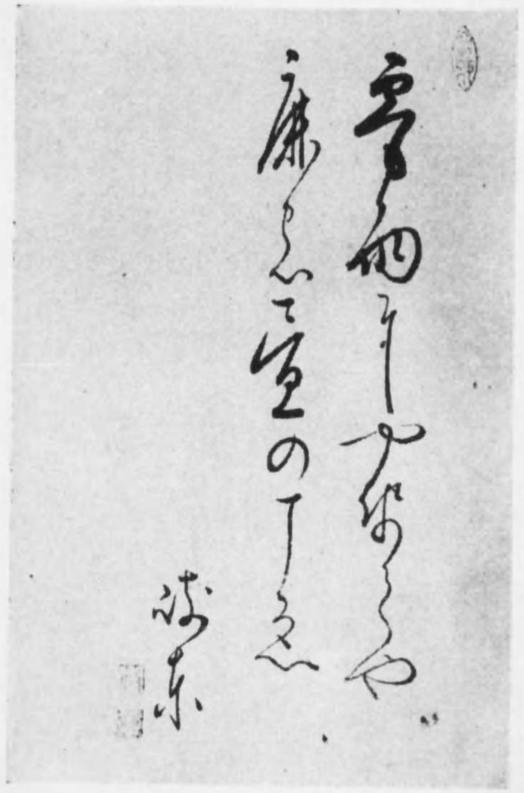
打おれは苔の根のある氷柱かな



其日菴
野逸

名月や
鰹の後の
海の色

野逸（加藤氏）素丸の門、江戸の人、通稱定四郎、其日庵四世、休々庵、七五庵、六七庵、七七庵、七八庵、竹冷舍、甘夜坊、默窓、一馬、素丈等の號あり、文化四年正月十五日、歿享年八十、著書に「松の栄」あり（文化十年）



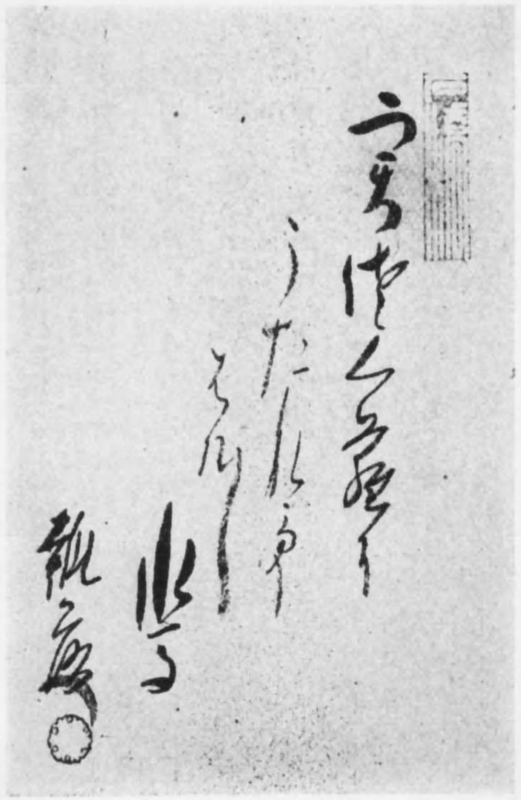
霧雨にやせてや
鹿の畫の聲

岐東

岐東は越後高田の人、文化年中、倉石忠左衛門、士朗の門人。

おもしろし
さひしく
花の
ちる日
かな

野鶴



寒さくらに
うたれて
はやし

水馬
瓢落

註　水馬はミヅスマシと稱する水上に浮遊する小蟲

指方（越後高田の人）

蝶鳥の眉なつかしき二月かな

祖明（前掲）

後の月果は戸にきくあらしかな

風狸（越後高田の人）

雲飛て暴風吹來る山近し

文中

松しまや入らぬ霞の立て來る

和童

けふよりや柳そかひの初さくら

三居（閑古鳥の著者、寶暦七年）

紫陽花や蝶も留らす鳥も寐す

曳尾（醫又俳人）

雪滿て松より瀧をこほす哉

舉遠（加賀金澤の人、太田屋四郎兵衛）

笹の葉にかくるるほとの小鮎かな

蘭尾（加賀金澤の人、水野次郎太夫）

水音を山にこたへて夜寒かな

荷篠（能登井田瀧之坊）

竹の根に氷つらぬく朝氣かな

狂　雅（京都の人）

蛭の子の一入蒼し春の水

放　齋（甲陽山人）

杜若白くさくさへほいなけれ

文　弄（卯花亭）

何を思ふ蝸牛や角ののひちちみ

援　左（漱芳菴）（信濃善光寺の人）

四五反の出水かかりや郭公

桃　路

けふの月見つめてしはし曇りけり

蘭　長

安達野におとろ髪ふる尾花かな

素　語（信中）

のこる蚊よ寐よ氣ふく風おもひしれ

青　錢（加賀小松）

散花に肩のはつるる羽織かな

荷沙坊（信岩野）

花に物思ふ上行く月見かな

江　水（同右）

夢に秋しるや一葉の落る音

松　故（同右）

雨あかり夕日に殘るあつさかな

もりかせ

月よこんこほたるよこんこ川涼

延雨亭

終夜鐘をしつめて積る雪

之　室（越後高田の人）

こからしの別るるかたや月のかけ

紫　綱

日のすきや花一坂の朝氣色

雨　柳（信中　帛の庵雨柳）

かしこきかな　此ふみ　名たたる人人のかいつけたまふ　そかしりへにおのれにも　しる

すへくのり給ぬれは　いなみかたく　かねて言捨てしを筆とりて

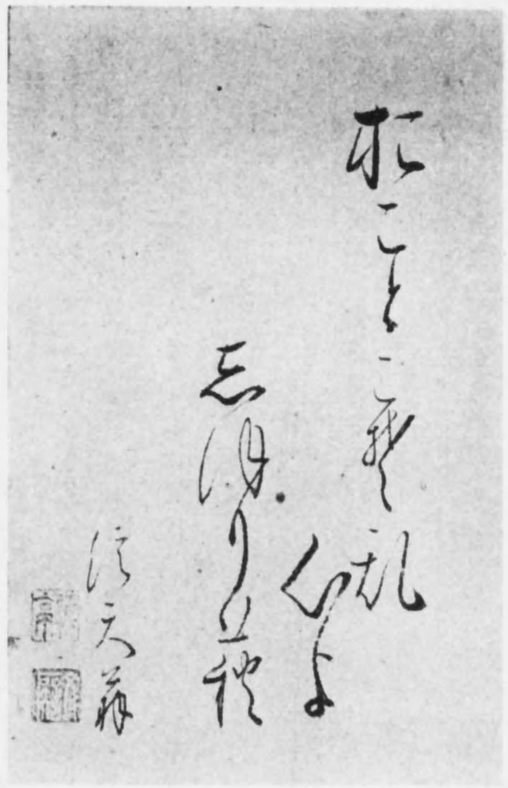
うくひすや三陽を吐くころほほほ

舟　山（松勝亭）

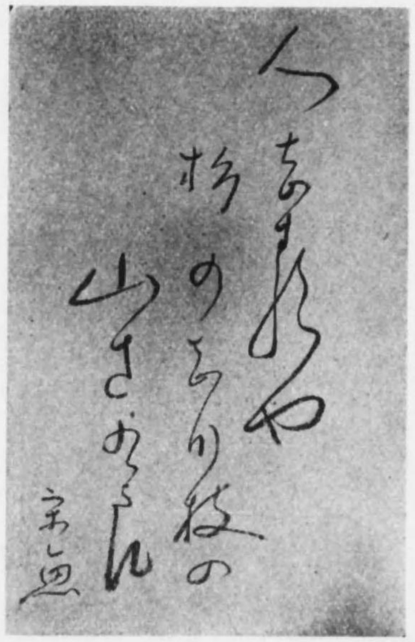
よふよふとおく山椿咲きにけり

加　英（北越春日）

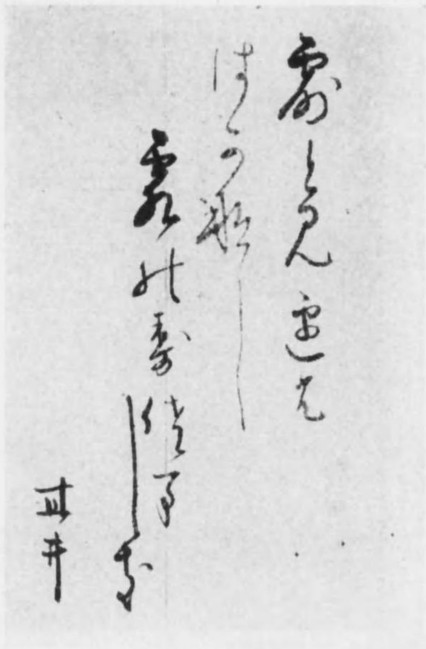
松風はわかれてみゆる時雨かな



おことこそ亂
心よ
しほり萩
信天翁

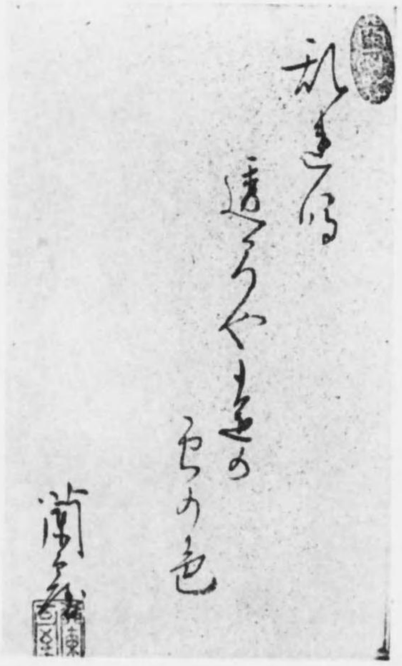


人知るや
杉のしつ枝の
山さくら
宋魚

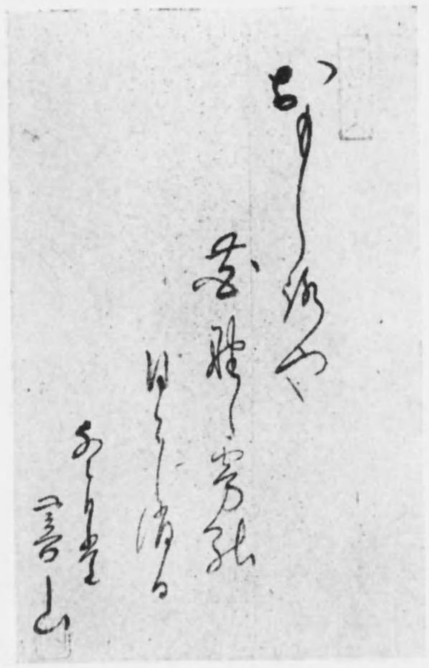


露と見れは
はかなし
霜のすさま
しき
甘井

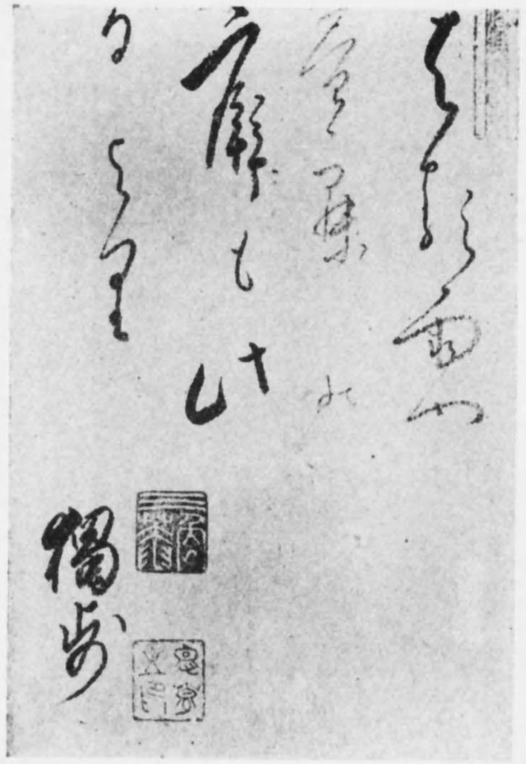
鈴木甘井、越後高田人、名は一保、通稱半兵衛、文化九年三月歿、享年六十九、和漢の群藉に通じて天下に名を識らる。榊原家に仕へ江戸に住す。「金蘭集」「金蘭抄」「俳諧翁譜」「頁城郡古物圖考」「國書大旨」等の著あり。



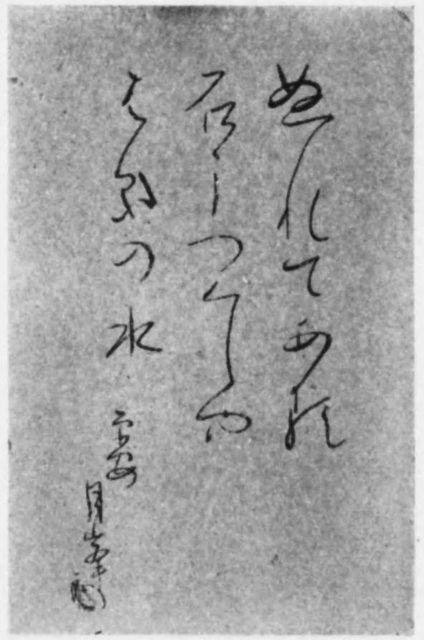
亂れ鳴
透間や遠の
虫の聲



おもしろや
花野の霧の
日に消る



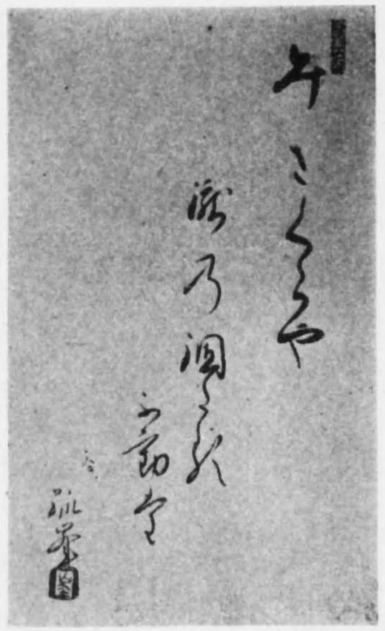
はる雨や
晝寐の
癖も此
日より



ぬれてある
石うつくしや
はるの水

月　峰

天保十年十一月九日歿
享年八十、東山雙林寺
卅四世住職名晨亮、大
雅堂二世、菊瀾と號し、
俳諧を善くす。



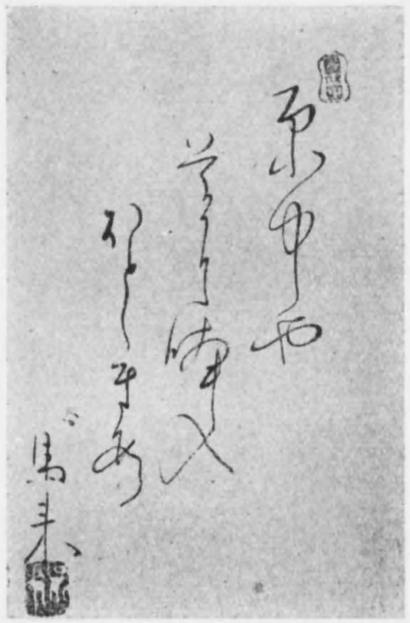
みさくらや
瀧の涸れたる
不動堂

孤　峰

川上氏、金澤の人、不
羨庵、停々齋、孤峰等
の號あり。嵐雪の高弟
三田白峰の門人。

ははききや
月もしなのの
雪に見えて

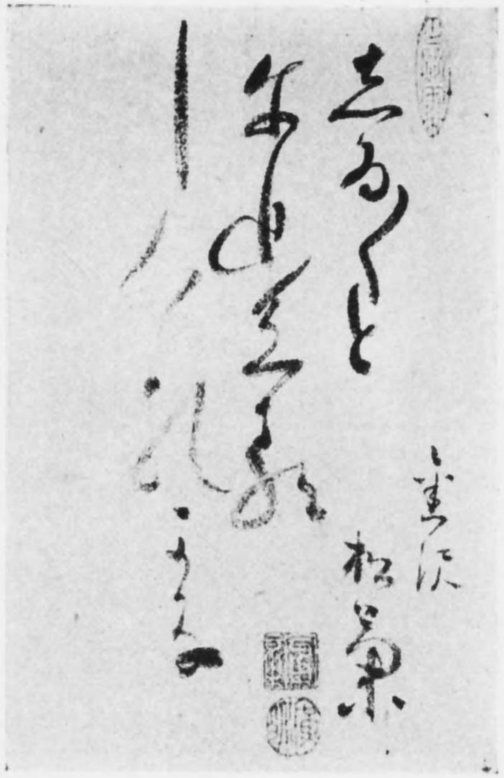
希因の男、加賀金澤の人、暮柳舍二世、和田氏、通稱市郎右衛門、綿商人、俳諧を好み又茶事を善くす、暮柳發句集四卷編（明和三年）



原中や
草に啼入る
ほととぎす

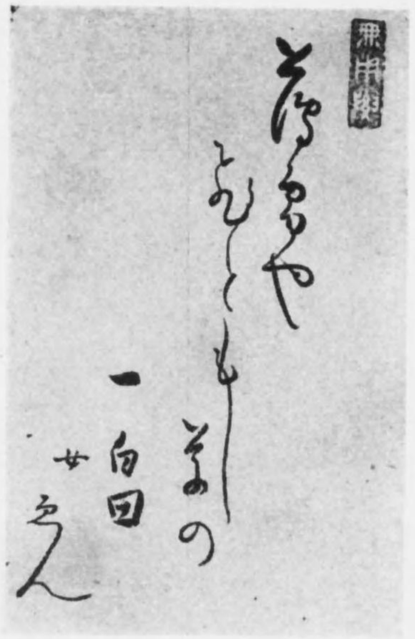
馬來

上田氏、加賀金澤の人、通稱養元、醫を業とす。闌更の門人、柿丸舍、槐庵等の號あり、寛政四年七月十二日歿、享年五十四。

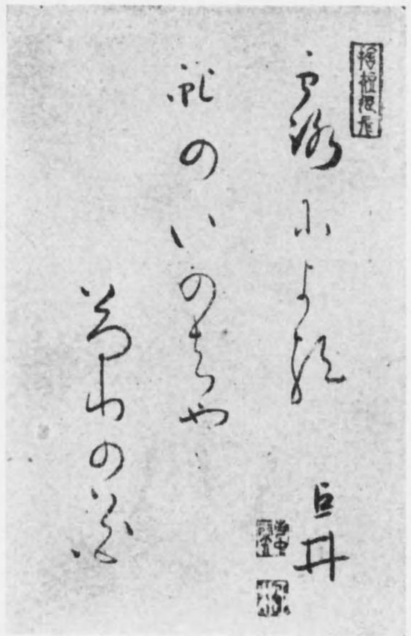


しゐ〳〵と
牛追立てる
しくれかな

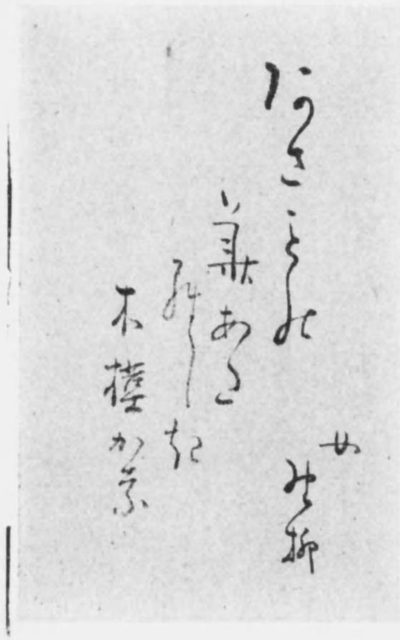
金澤の人、闌更の門人



薄雪や
ひともし
草の
一畠



露による
虻のいのちや
菊の花



あさことの
花あたらしき
木槿かな

丹霞

深山家や三日としるらん桃花

怡水（能登黒島）

白梅やはらはら玉のちるけしき

麥秀（同右）（中町氏、桃興齋と號す、岷考の門人）

山吹や水にされたる蟹の甲

都山（同右）

雪踏て鶯を聞深山かな

楓原（武陽）

小夜搗衣常陸の神も世ははかな

古佛

杜鵑とひあかるほとちかきかな

竹茂（倉石氏、越後高田藩中）

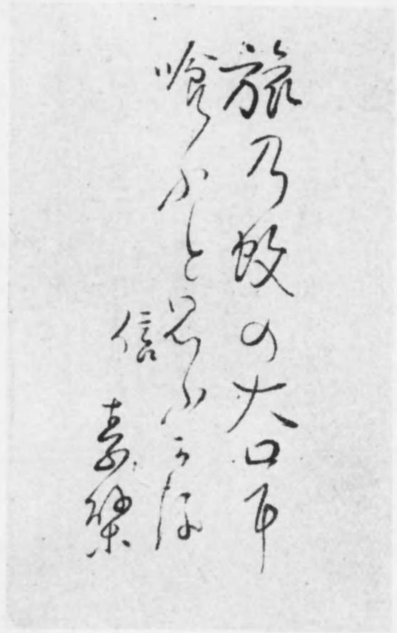
玉津嶋をおろかみ奉りて

うつくしき秋の旭やわかのうら

自德

讀本のいくさ咄や燈とり虫

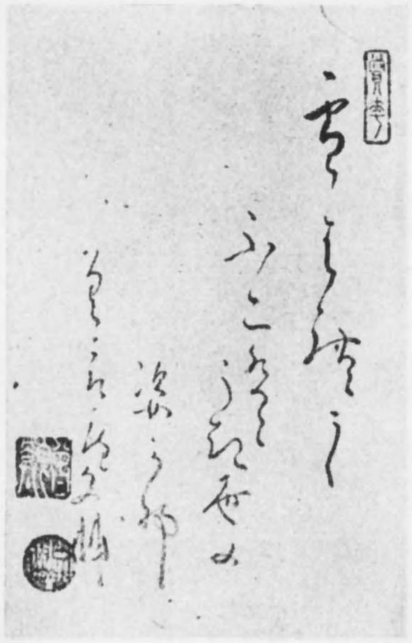
（註　讀本は讀み本のことなり）



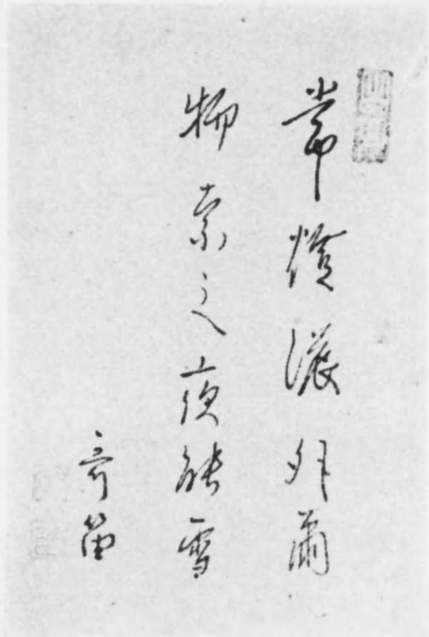
旅の蚊の
大口に喰ふと
思ふかな

素檗

信濃諏訪の人、藤森氏、曉臺の門人、文政四年歿。



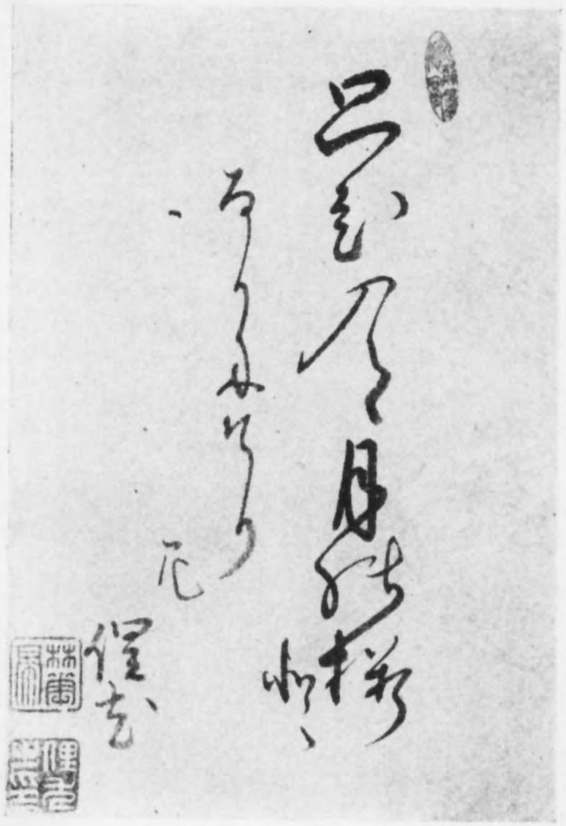
雪はれて
不二は
うきよの
姿かな



常燈濃外爾
物奈之夜能雪

可笛

太田氏、五外菴蝶夢の
門人、日向の人。



思ひ入て
月の櫻と
なりにけり

井々

清水よりしみつにおよふ野水哉

三机

七夕やおりゐの繼も世にあらん

雲帶（成澤氏、白雄の高足）

嚴島にて

廻廊の灯かけをくたく卯波かな

（註　卯波は小波のことなり）

泉明（安政五年六月三日歿、享年七十八、佐々木氏、通稱住屋市兵衛、草秀の門人なり。大阪の人、藥種商。）

初午や辨當見れは赤の食

浪花七十二叟泉明

月草

ふくる夜を虫や靜に鳴つのる

甫尺（宮嶋の人、書畫を善くす。奥の細道を一双の塀風に畫きしものあり）

日和にもまきれぬ秋のこころかな

和量

野分する地にはらはらと雀かな

素有

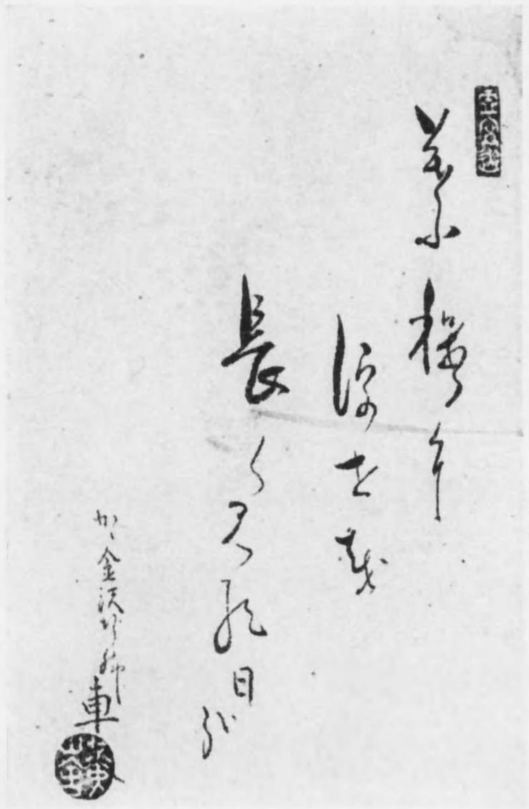
ほとはしる水は柳の力かな

烏臼

紫陽や優婆塞可庭廼古井筒

金毛（能登）

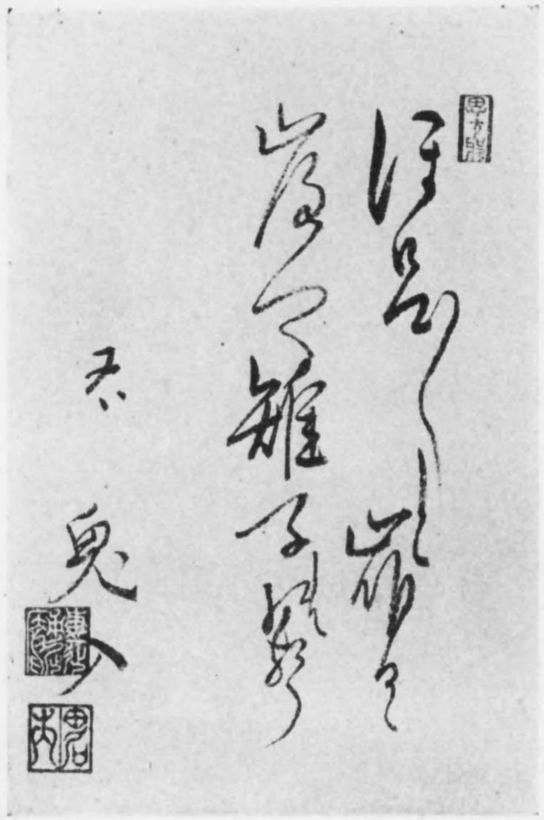
明みたす竹に氷柱の野川かな



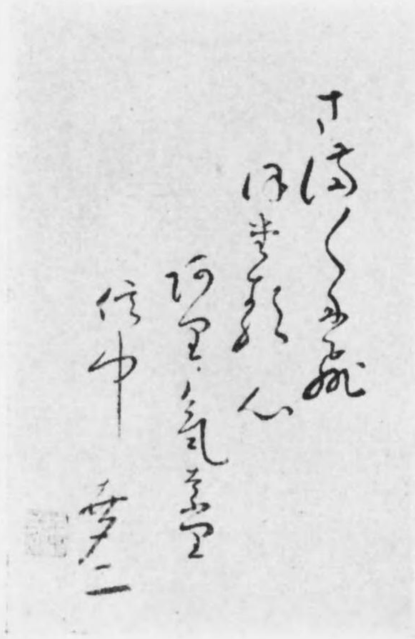
葉櫻に
浮世を
長く見る
日哉

車大

加賀金澤の人、黄仙舎車大と號す、暮柳庵三世、後川の門人。



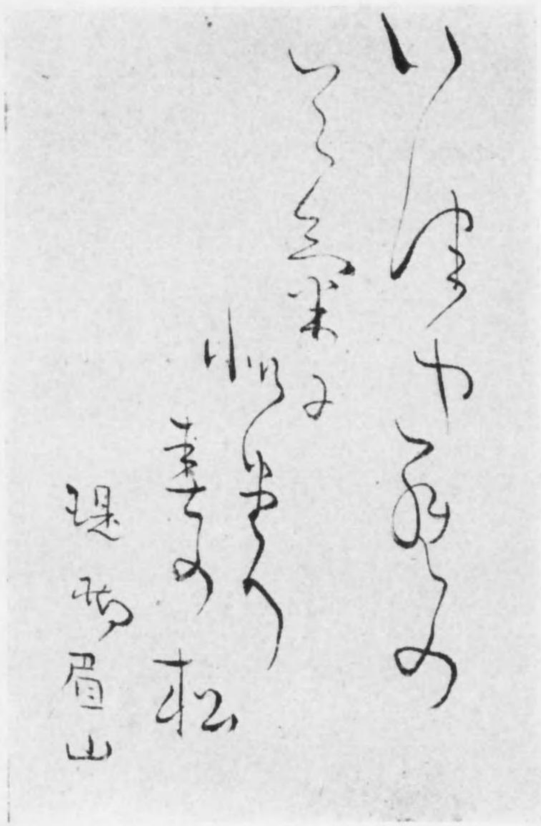
ほろ〳〵と
崩るゝ
岸や雉子の聲



さま〳〵に飛
ほたる心
あり氣なる

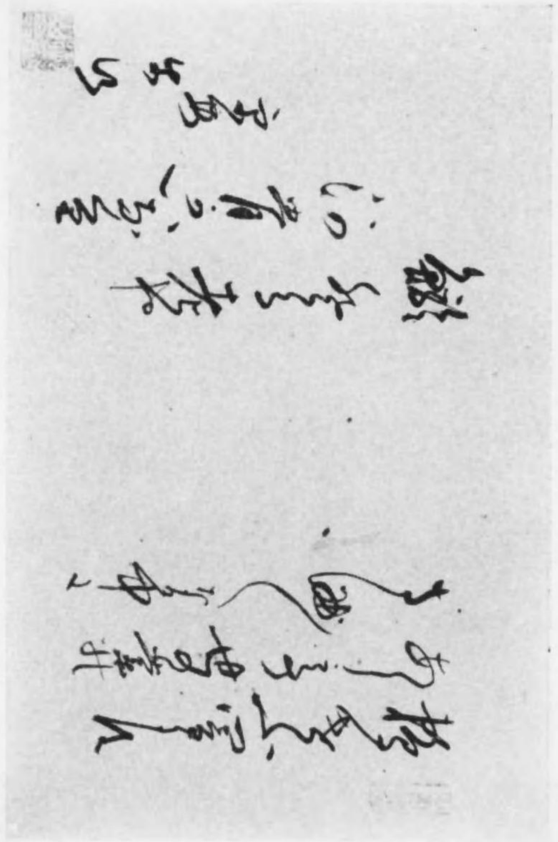
麥二

小島氏、白雄の門人にして岡崎玉馬の師匠なり。



いつやらの
天氣に
似たり
春の松

中山眉山、闌更門下の上田馬來の門人、金澤の人、文化十三年歿。金子平六郎（如蘭）の建てし芭蕉翁句碑に紫陽花の句を揮毫せし俳人なり。



（門の口柱・八の都京・翁山射御・嶽流今）　鮫兼行年

鶴道ら間に行あらで
世の業の寄ふ〜なる中に
鮫はこそ老や
河骨かりなべり

（註　鮫は下ナイタウ　こさ）

白菊に露
そゝきけり
妙喜庵

重厚

井上重厚、五升庵蝶夢の門人、蝶夢高弟爾時庵沂風の後を承けて、大津義仲寺無名庵を嗣ぐ。初代興雲より四代目なり。

東籬

おとにきく寒山寺かや枯尾花

葛　三（前掲）

倉田氏、白雄の門人

花椿多くひとめの外を散

貞　松（前掲）

梅鶯婦際輪竹遠裂流須

沙　言

鶯や淺妻船は宵のまま

瓜　坊（五茶庵）

春の月ある夜夢見し海と山

豁　然（吾從房）

はる雨や雫にぬるるかな手本

以　今

荒灘や楫にこたゆる安幾廼可勢

阿　藏（前掲）

戯に品さためたる頭巾哉

闌　更（前掲）

ある日華頂のたもとに遊ふに人のゆききの無ならさりけれは

花に鳥群集になれてなくねかな

吳　曉（能登三階）

鳴先を雲流てや歸る雁

李　月

人を見て妻乞やみぬ朝の鹿

山　古（橘雪）

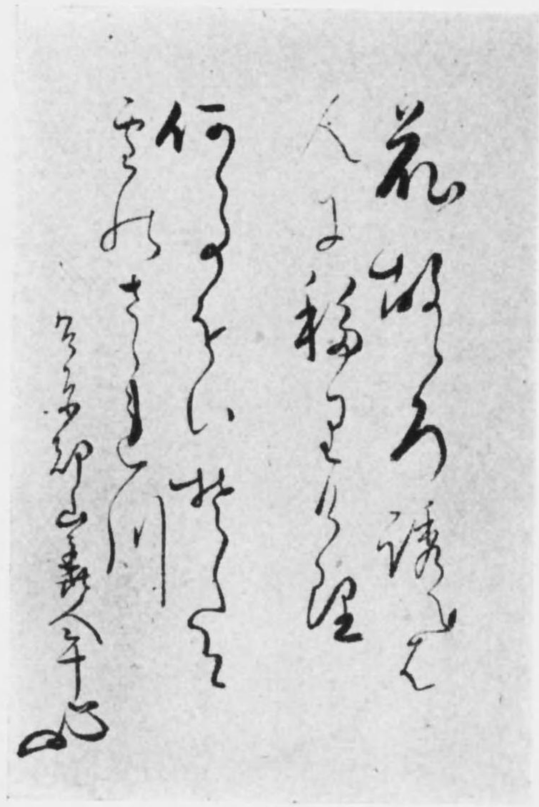
居風呂の水流す夜やほととぎす

馬　肝（湖十の門人、江戸の人、山崎喜内、馬登館、月翁、圓月、馬肝等の號あり、安永三年十一月十一日歿。）

何に身を焦すともなし雨の蠅

石　蘭（幕府の字工、石中庵と號す、月居の門人なり、文化二年五月二十日歿。）

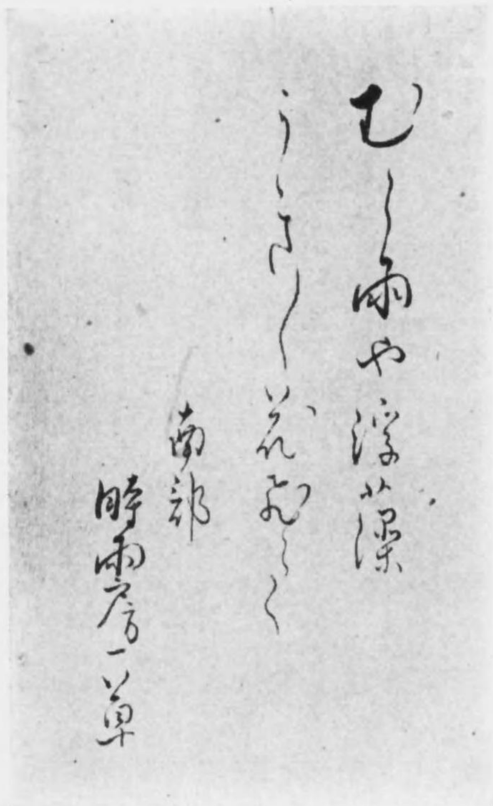
たちいてて探幽戀しゆふかすみ



花こゝろ誘へは
人に移りけり

何事をいそくそ
雪のさゝれ川

午心
蓼太の門人、江戸の人、岩波氏、葎雪庵、山花人と號す。文化十四年一月十二日歿、門人に葎雪庵北元あり。



むら雨や浮藻
うきゝ花ひらく

一草
時雨房一草は北枝門下の子日庵佛仙の門人なり奥州の人、攝津に住す。門下に山村草齋あり。

梧　泉（通稱鯛屋清兵衛、月太郎と號す、月巢の門人なり、駿河の人。）

きのふ過けふ捨草の若菜かな

菊　明（通稱田中宇兵衛、江戸の人、文化年中歿。）

ほととぎす暫ここそ騷しき

御　風（秋山御風、北松門、渭虹の高弟なり、江戸の人。）

目の屆くかきりや月の安房上總

雨月閑人

あつき日や桐の葉かりて簷かつら

袁　丁（琅玕井）

ほととぎす手を拱いて五十年

半　瓜

富士垢離に先見て置や雲の峰

福井市隱

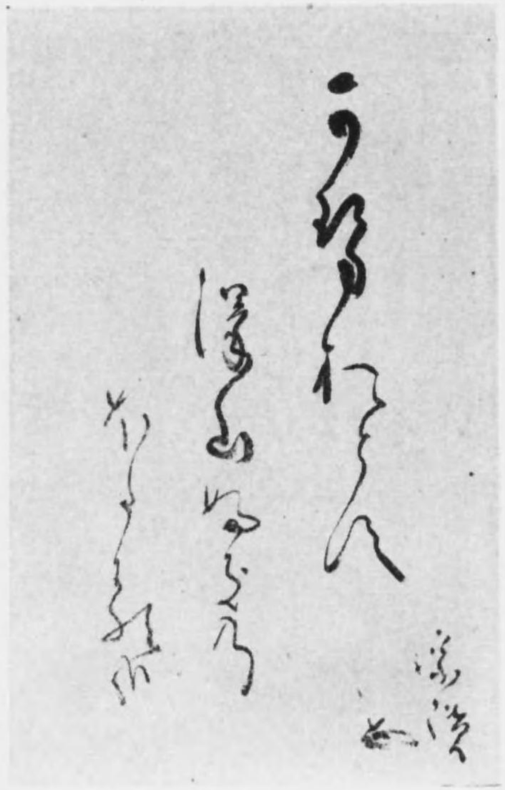
枯野はらすへの鹽路は青くたかし

順　之

さまさまにしくれて風情柳はら

一　樹（浪華）

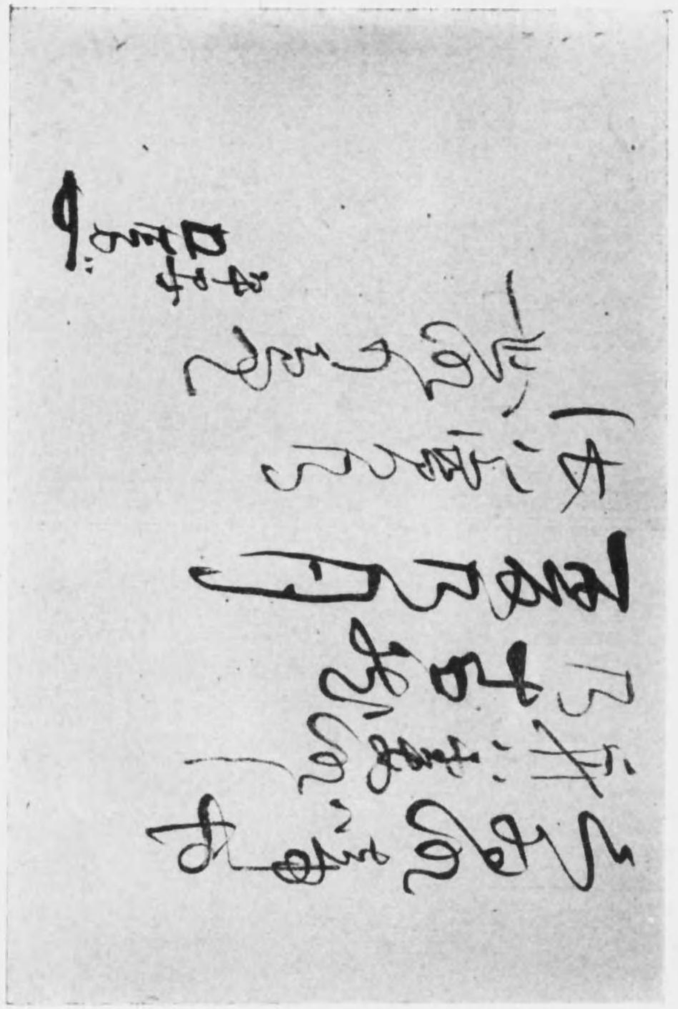
三五夜中龍のみやこの楊屋町



かせおとす
澤山ふきの
ほたる哉

宗讃

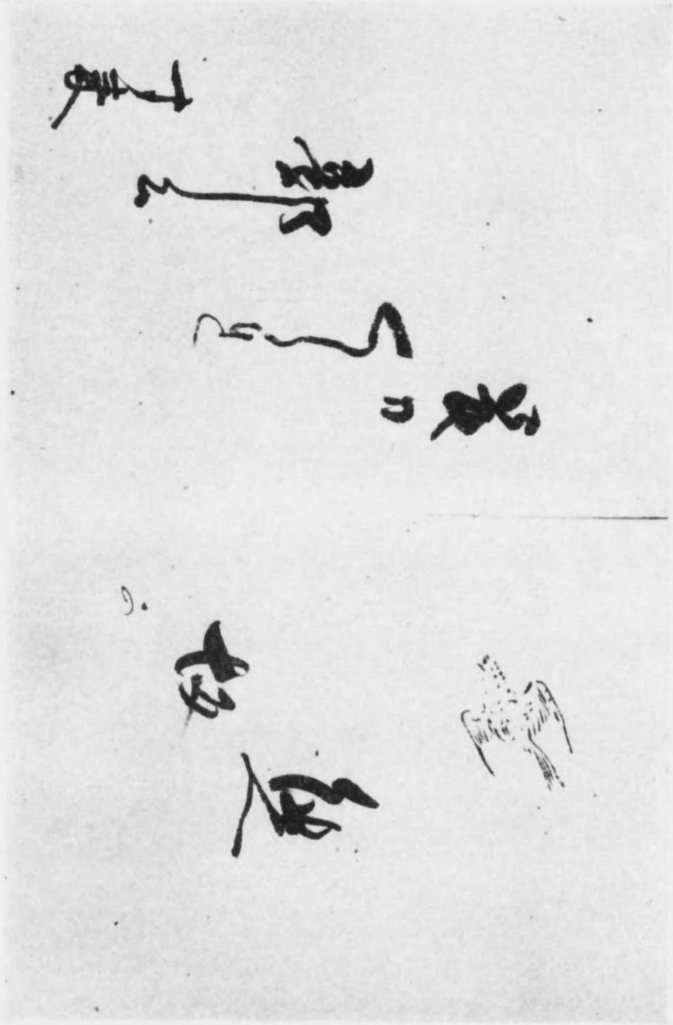
白雄の門人、去來菴宗讃と號す。如毛、雲帶、麥二、春鴻、葛三等皆同門なり。



五芳筆蹟

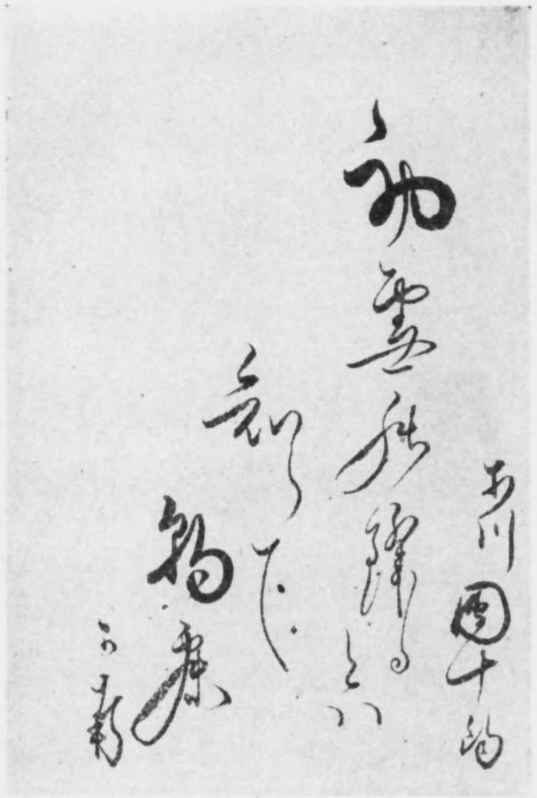
へゐなゝ時や身は素なしの古袍
夏の月風は實の世なりけり

五芳は園屋の門人、石田氏、有津庵蘭雲と號す。蘭屋の入、文化六年歿。



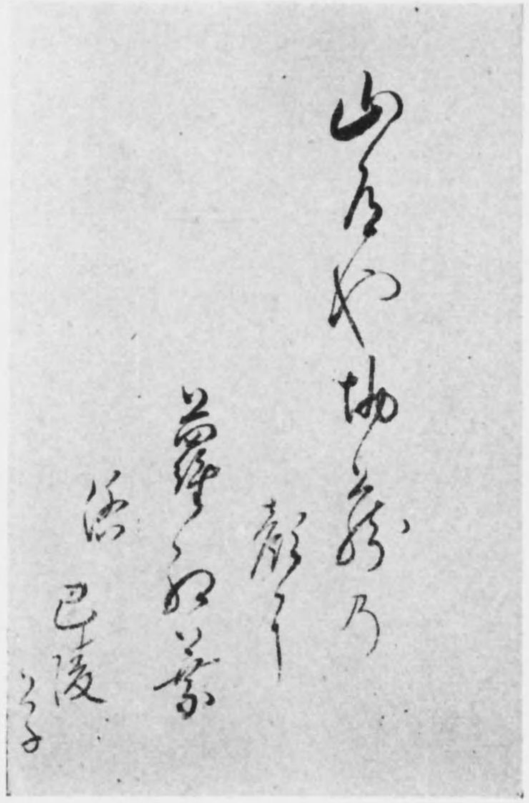
能坂か長刀へゝれ郭公

寸來筆蹟



初雪の降るとは
知らて
朝寐
かな

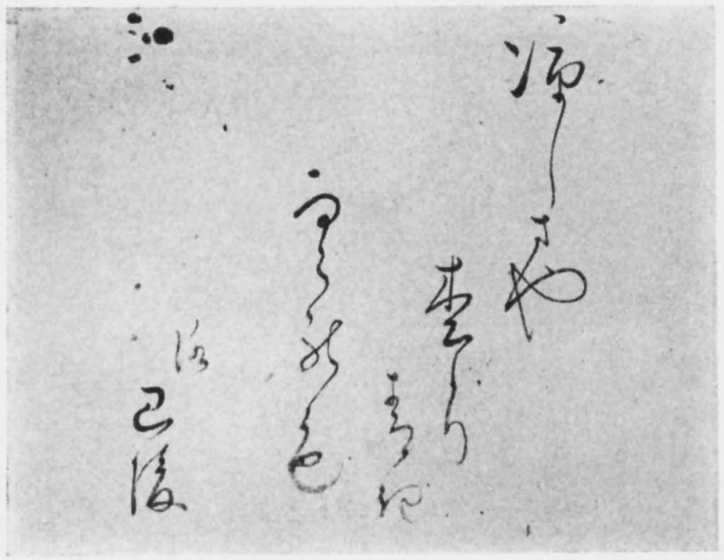
團十郎
第七世團十郎成田屋、白猿と號す、安政六年歿、享年六十九、俳句を善くす。



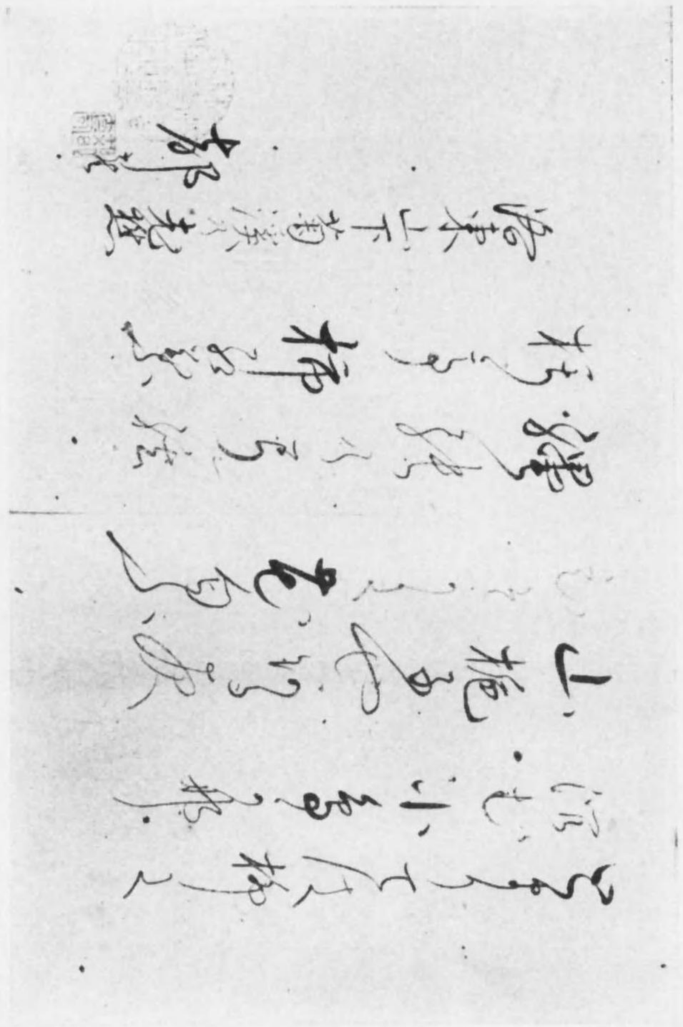
山道や
地蔵の顔に
蘿紅葉

巴凌

下總の人、垣見氏、通稱半藏、出松庵と號す、乙由門下白井鳥酔の門人、寛政十二年七月十七日歿享年五十餘茶道を善くす、「みち奥日記」の著あり。



涼しさや
松より
青き
空の色



都雀遺墨

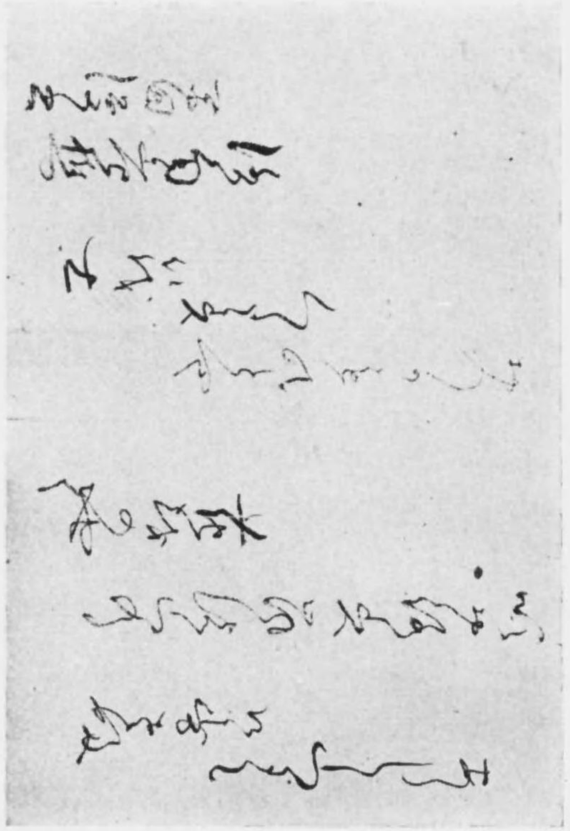
都雀

洛東山下菊溪之老樵と稱す、號を菊溪庵、宇賀房等と稱す、本願寺の寺侍なり、伊勢の人、京都に住す、巴人門の岡田文誰の高足なり、高城氏、寛政十一年十一月八日歿、東山、清水墓地に葬る。

とまりては柳に沈む小鳥かな

山梔子やある夜ひそかに花匂ふ

繩張の弓ン絃朽て柿紅葉



閑田　兼路

あらしふく山のこずえの風の音にたへぬ花をのこすな

閑田遺書　浴雨老様

閑田

伴蒿蹊、國學者、通稱庄右衞門、閑田子と號す、近江國八幡の人、京都に住す、萬葉學者として名あり、鷹菴、澄月、慈延と共に平安の四天王と稱せらる、文化三年七月二十五日歿、享年七十四、洛東智恩院に葬る、著書に閑田耕筆、近世畸人傳、同續、國文世々の跡、譯文童喩、勝地吐懐編、加具つちのあらび、大和物語補翼抄、閑田文章、閑田詠草、閑田の早苗、增補題字要解、庭の訓抄、謌辭要解、萬葉類葉代匠記句解、同續篇等あり、正親町天皇、周翰親王の知遇を辱うす、大正四年從四位を贈らる。

文　溪

かはやきの芽を吹たつる冬野かな

野　嶠（加賀の人）

牛吼くやそらに梼のおほろ哉

悅　懸（湘へちま房）

草枯やあらしの末の蛇の衣

儲　香（會津岡立坊）

夜嵐の戻る音あり紙衾

椿三洞（飛彈高山）

旅の意と題して

明たてに錠をさす門のしくれかな

雪　窗（浪華の人）

山賤か聞たるあとか時鳥

栗　門（四空栗門）

あさくもり地からはれたり花うつき

羽　積（浪華の人）

喰はてのめるさかなや庵のほとゝきす

流石庵羽積のぬし先年七萬七千餘を撰まれし卷頭句者にかはりて

京師　蘆人書

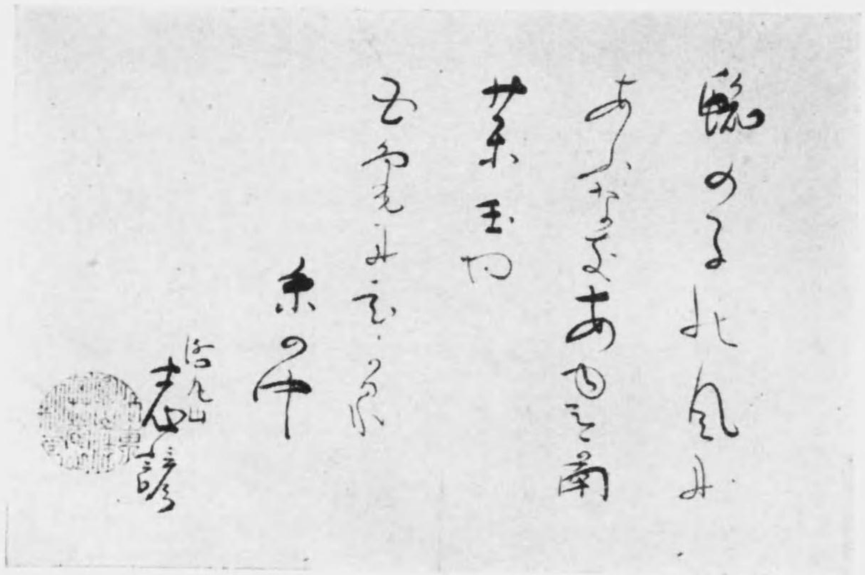
浪華　越連

名月やそも〳〵花のちりしより

志諺筆蹟

蜘の子の風にあふなきあゆみかな
瓔珠や五色にひかる糸の中

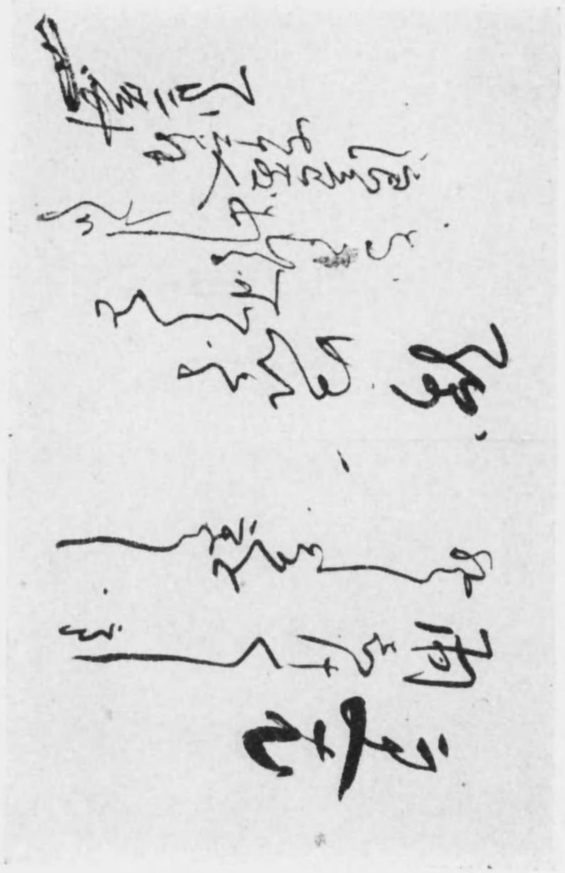
四時堂志諺と號す、巴人の門下高城都雀の高弟、京都住、「發句下畫」の著あり。



八千房筆蹟

寒月やからりと鹿の角と角
ほと〻きす啼よ小さ〻のしのに雨

浪速の人、其角の門人なる松木淡々の高弟、堀舍樗の門、八千房派。



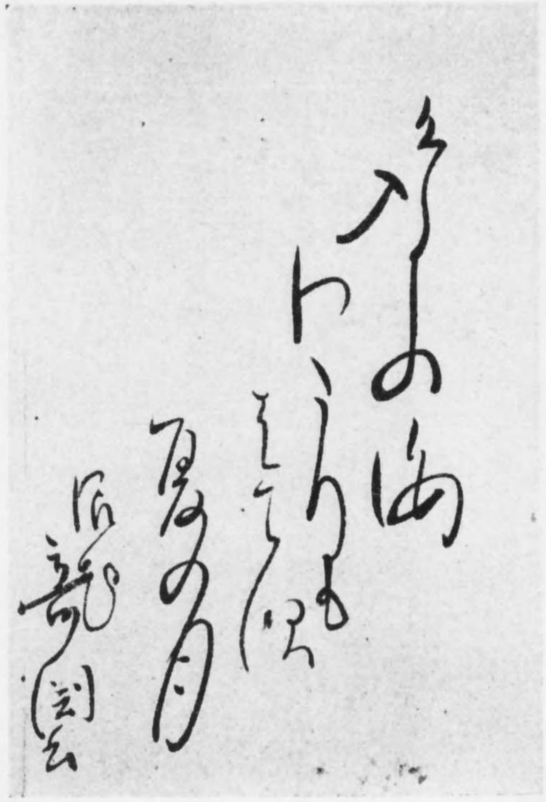
不二庵 浪華山人 七十二翁 雪舟

雨しけへ月よしてとしなを深し
絵めりこそらさまかりさるあしたは

不二庵 浪華山人 七十二翁

不二庵

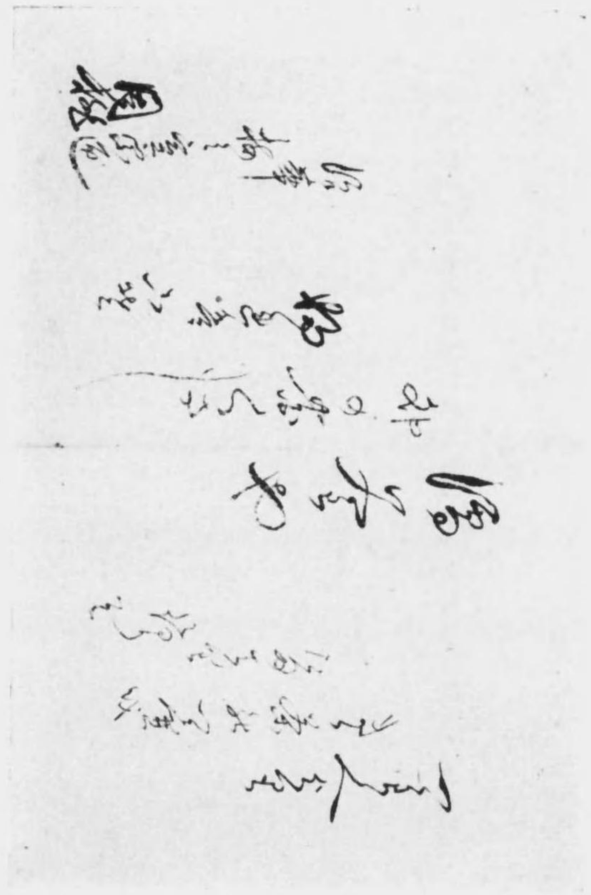
不二庵又二柳庵は桃居の別號あり、勝見氏、名は元茂、三四坊とも號す、加賀の人なり、桃妖及希因を師とす、五十歳の時大阪に卜居し、芭蕉堂を建て、其の百回忌に三日間法會を修し、追善句を選す、當時第一の俳人と稱せらる、二條家褒章を下して特に中興宗匠と稱せしむ、享和三年三月二十八日歿、享年八十一。



鳴の海
わたりも
はてす
夏の月

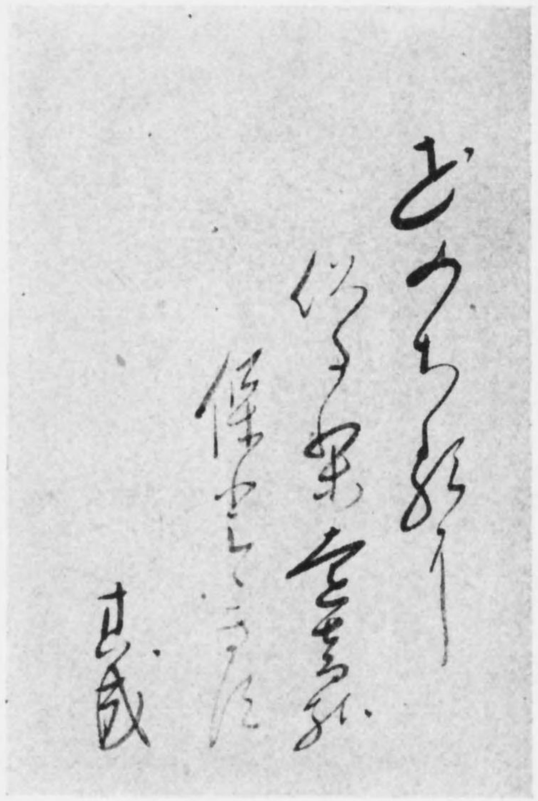
奇淵

茅沼氏、花屋庵、大里庵、七杉堂等の號あり、大阪の人、天保五年五月十八日歿、享年七十、二柳庵栽居の高弟なり、「芭蕉袖雙紙」の著あり。



梅之室宗匠

一人なるや否やは不明なり、櫻井梅室は明和六年加賀
金澤に生る。父の業を嗣いで磨師を以て加賀侯に仕へしが、病を以て致仕し、業を
弟子某に讓り俳諧の道に入る、闌更門下なり、嘉永四年四月十五日、二條家より花
の本宗匠の名を許さる、曉臺、闌更、蒼虬、鳳朗の後を承けて花の本宗匠と稱す、
嘉永五年十月京都に歿す、享年八十四。



花のちるに
似たり遠音の
ほとゝきす

共成

京都の人、通稱菊舍太兵衞、睡室又醉庵と號す、蕪村の門人なり、凡董、月居、召波、自笑等皆蕪村を師とせり、著に「鶴聲帖」、「蕉門中興俳諧六家集」等あり。

浪華七十五翁（花押）

青柳のやまとの國と申さはや
とまりては愚にみゆれほととぎす
きく四五本また名もつかて匂ひけり
おしとりに一夜別れて戀をしれ

呑秋莽（浪花）

夏

そら豆の花ちる里やほととぎす

蛇　蟄（平安）

千筋より石もゆるかん蟻の道

丈　波（同右）

蓬生や燈に來ぬ虫の秋を、啼

無　涯（備中倉子城）

入梅や何をうそふく晝の蟇

白　黛（洛）

夕雲もたゝす皐月の根晴かな

不　防（洛）

几帳越して雛の顔はく柳かな

寒　洞（浪華）朝松軒と號す、千山門人、播磨の人。

秋もはや鳥おとろかぬ案山子かな

栢　巣（浪華）

ほととぎす淀鳥羽過て雲の上

さる雄（浪華の人）

旅人にくすり施す清水かな

寄　人（倉子城）

賣人の顏見られたる螢かな

梅　斜（平安）

鳴戸こす舟の行衞や雲の峰

潮　路（同右）

乾入梅や坎に重き蜘の糸

梅　溪（洛）

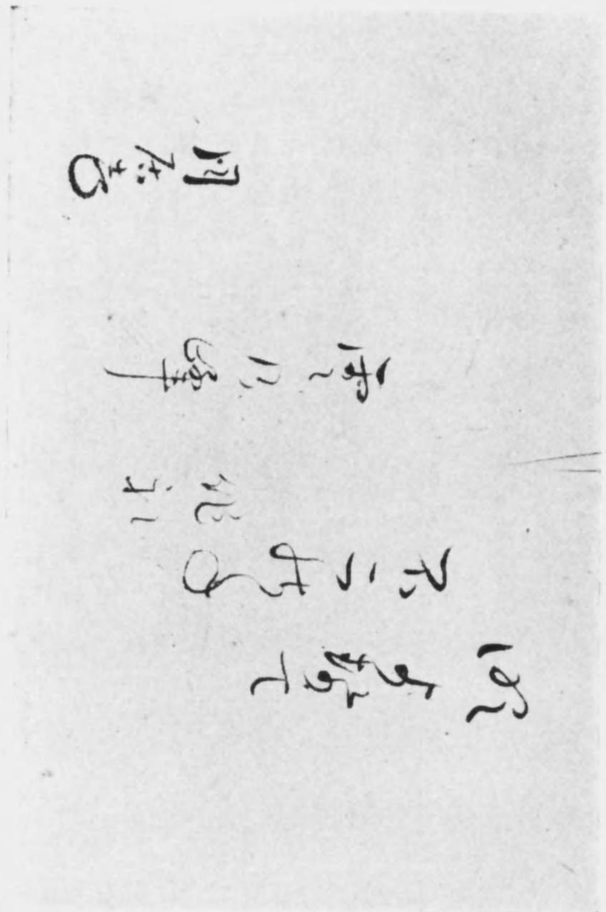
東門柳

樓の灯に軒の柳の亂れけり

紅燈穿柳映清川
妓女抱琴歌月前
遮莫樓頭賓客樂
我携一杖入詩篇

月居　筆蹟

吹とぢて
不二ながら
作にのこれる
雲の峰

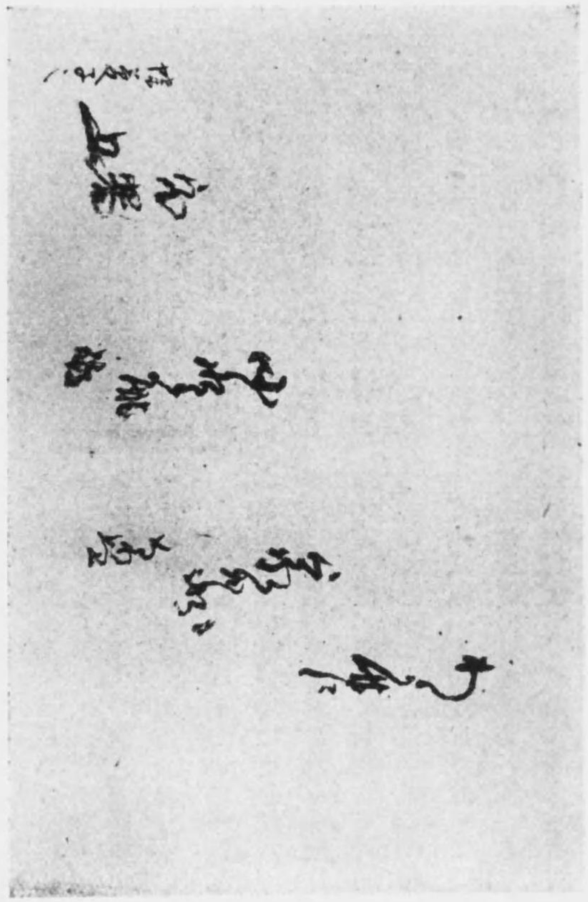


月居

月居

月居は京都の俳人、氏は江森、號を些居、竹巣と稱す、蕪村の高弟にして道彦、士朗と合せて蕪村門下の三大家と稱せらる。文政七年九月十七日歿、享年七十九、山城一乘寺村金福寺に葬る、著書に道の便、俳諧月居七部集（二卷）、白馬奥儀解、俳諧問答等あり、月居又村田春門に學び和歌を善くす。

涼しさや
飛越える
石を
水の行
洛蝶夢



蝶夢筆蹟

わか竹に
家かさりぬ
小野龍蘭

蝶夢

蝶夢は希因門の高弟闌更と共に蕉門の鬼才として當時天下に名を成せし俳僧なり、門下に太田可笛（前掲）、井上重厚（前掲）等その數非常に多し、淨土宗の僧、字は幼阿、泊庵及五升庵の號あり、初め京都阿彌陀寺の子院なる歸白院に第十一世の住持として住みしが、後住職を辭し、山城岡崎に庵を結び、專ら俳道に精進すると共に、著述に晩年を送る、貞享、元祿の俳諧書數部を再刻して大に後人を益す、寛政七年十二月二十四日寂、享年六十四、黑谷に茶毗して阿彌陀寺の墓地に葬る、遠近諸國の門人等はそれぞれ追善の會を開く、皆川淇園、伴蒿蹊、澄月、慈延、藤貞幹等皆詩歌を寄せて哀悼す、寛政八年「意新能日可麗」はこれを錄す、著述の中其の主なるもの下の如し、乙酉墨直し、去來丈草發句集、翁文集、翁反古、翁反古塚の碑の記、新類題發句集、蝶夢和尙文集、祖翁百回忌、蕉門俳諧語錄、芭蕉翁文集、芭蕉俳諧集、芭蕉翁繪詞、類題發句集、俳諧名所小鏡、ふいの柳、語類等々。

鵝十

岡の道や夕され登る冬木立
風に吹かれ姑の豆腐賣

鬼工

動ものは水の障子に後の月
河豚小ふく何を恨の腹太き

北金坊（加陽翠臺）

岸の家春は柳に隱れけり
布薩會も過にし寺や夏の月

註　布薩會は一週に一回又は一ヶ月に一回づゝ僧侶が集りて修養の爲の反省や、勤行等を爲す會合なり。

つぼつぼの音はかよはきにあきの月
三度風呂に入て眠るや除夜の果